

# 大菩薩峠

東海道の巻

中里介山



これらの連中がみんな東を指して去ってから後、十日ほどして、一人の虚無僧こむそうが大湊おおみなとを朝の早立ちにして、やがて東を指して歩いて行きます。これは机竜之助でありました。

竜之助の父弾正だんじょうは尺八を好んで、病にかからぬ前は、自らもよく吹いたものです。子供の時分から、それを見習い聞き習った竜之助は、自分も尺八が吹けるのでありました。

眼の悪い旅には陸よりも船の方がよかろうと言ったのを聞かずに、やはりこれで東海道を下ると言い切つて竜之助はこの旅に就きましたのです。

旅の仕度や路用——それは与兵衛の骨折りもあるが、お豊の

実家亀山は相当の家であつたから、事情を聞いてそれとなく万事の世話をしてくれたものであります。

尺八は持ったけれども別に門かどづ附けをして歩くのでもありませんでした。天蓋てんがいの中から足許あしもとにはよく気をつけて歩いて行くと、それでも三日目に桑名の宿しゆくへ着きました。ここから宮まで七里の渡し。

竜之助は、渡しにかかる前に食事をしておこうと思つて、とある焼蛤やきはまぐりの店先に立寄りました。

名物の焼蛤で飯を食おうとして腰をかけたが、つい気がつか  
なかつた、店の前に犬が一ぴき寝ていました。

大きなムク犬、痩せて眼が光る、蓆むしろを敷いた上に行儀よく両  
足を揃えて、眼を据えて海の方を見えています。

「これは家の犬か」

「いいえ、まぐれ犬でござんす」

女中がいう。

「それを、お前のところで飼っておくのか」

「そういうわけでもございませぬが、ここに居ついて動きませぬので」

「そうか、これはなかなかよい犬じゃ、大事にしてやるがよい」

「ほんによい犬でございます、見たところはずいぶん強そう

でございますが、温和おとなしい犬で、それで伶俐りしやうなこと、一度しか

られたことは決して二度とは致しません、まるで人間の言葉を聞き分け人間の心持までわかるようでございます」

「そうか」

「それですから、近所でもみんな可愛がりまして、御膳ごぜんの残り

やお肴さかなの余りなどをこの犬にやっておりますし、犬もここを宿

として居ついでますから、こうしておきますので、もし飼主でも出ましたら返してやりたいと思ひますのでございますが」

「これこれ、お前の名はクロか、ムクか、こつちへ来い」

竜之助は天蓋てんがいご越しに犬の姿をよく見ていると、犬もまた竜之助の方をじつと見ています。

竜之助がこの店を立つと、犬がそれについて来ます。

渡場わたしばまで来ても犬は去りません。竜之助もまた追おうともしません。竜之助が船に乗ると、犬もそれについて船に乗ろうとして船頭どもの怒りに触れました。

「こん畜生、あつちへ行け」

棹さおを振り上げて追い払おうとしたが逃げません。

「乗せてやつてくれ、船頭殿」

竜之助はなぜかこの犬のためにとりなしてやりました。

「これはお前さんの犬でございますかい」

「そうだ」

船頭が不承不承ふじようぶじように棹を下ろすと、犬はヒラリと舟の中へ飛んで乗りました。

桑名から宮まで七里の渡し。犬は竜之助の傍へつききりで、竜之助が舟から上ると犬もつづいて陸おかへ上る。

「これ犬」

高櫓たかやぐらの神燈みあかしの下で竜之助は、犬を呼んで物を言う。

「おれと一緒にどこまでも行くか」

犬が尾を振る。

「よし、おれの眼の見える間は跟ついて来い、眼が悪くなつた時は、先に立つておれの導きをしろ」

犬は竜之助の面かおを天蓋の下から覗のぞき込んでいます。

「江戸へ八十六里二十丁、京へ三十六里半と書いてあるな」

太く書かれた道標みちしるべの文字を読んで、

「鳴海なるみへ二里半」

竜之助が歩き出すと、犬もやつぱり尾を振って跟ついて来ます。

犬が竜之助を慕うのか、竜之助が犬を愛するのか、桑名の城

下、他生たしやうの縁で犬と人よしとに好みが出来ました。この二つがどこ

まで行つて、どこで別れることであるやら。

「桔梗屋ききぎやうやでございます、桔梗屋喜七は手前共でございます」

宿引やどひきの声。それには用がない。竜之助は神宮の方へは行かな

いで、浜の鳥居から右に寢覚ねざめの里。

花もうつろふ仇人あだびとの

浮気うはきも恋といはしろの

結び帛紗むす ぶくさの解きほどき

ハリサ、コリヤサ、

よいよいよい、よいとなア

ツテチン、ツテチン

心なき門かどづ附けの女の歌。それに興を催してか竜之助も、与兵衛が心づくしで贈られた別べつ笛ぶえの袋を抜く、氏うじ秀切ひでぎり。伽羅きやらの歌口うたぐちを湿しめして吹く「虚鈴きよれい」の本手ほんて。明頭みようとう来らいも暗頭あんとう打だも知ったことではないけれど、父から無心に習い覚えた伝来の三曲。

呼よび続つぎ浜はまから裁断橋さいだんばしにかかる。

こうして見れば、机竜之助もまた一箇の風流人であります。

それから浜松へ来るまでは別条がありませんでした。

浜松へ入って、ふと気がつくと、いつのまにかムク犬がいな

いのです。竜之助は名を呼んでみましたが、姿を見せません。立って暫らく待つていたが、どこから来る様子も見えませぬ。

さすがに物淋しくてなりませんでしたが、尋ぬる術すべもありませんから、一人で浜松の城下へ入りました。浜松は井上河内守

六万石の城下。

「おい、虚無僧こむそう」

横柄おうへいな声で呼びかけた武士。振返つたところは五社明神の社

前。

「おい、虚無僧、こつちへ入れ」

社前の広場に多くの武士が群っている。その中から、いま通りかかる机竜之助を呼び止めたものです。

「何か御用でござるかな」

竜之助は立ち止まって返事。

「ここへ来て一つ吹いてくれ」

「せつかくながらお氣に召すようなものが吹け申すまい」

竜之助は五社明神の鳥居の中へ入って行きました。

見るところで武術の催しがあつたもの。それが済んで、庭の広場で武士たちが大勢、むしろ藁を敷いて茶を飲んでいたところでした。

「さあ、そこでまずその方の得意なものを吹いて聞かせろ」

「別に得意というてもござらぬが、覚えた伝来の一曲を」

竜之助は、吹口をしめして「鶴の巢籠すごもり」を吹きました。誰も

吹く一曲、竜之助のが大してうまいというのでもありません。

「それは鶴の巢籠、何かほかに」

「ほかには何も知らぬ」

「ナニ」

「ほかに虚鈴きよれいというのがあるが、これは、おのおの方にはわかるまい」

「何を！」

「いや、駆出かけだしの虚無僧で、そのほかには何も吹け申さぬ故、これで御免」

「ハハハ、鶴の巢籠を吹いて虚無僧そうろうで候も虫がよい、そのくらいならば我々でも吹く、何か面白いものをやれ、俗曲を一つやれ」

「……………」

「追分おいわけか、越後獅子が聞きたい」

なんと言われても事実、竜之助には本手の三四曲しか吹けないのだから仕方がない。

「なるほど、これは駆出かけだしの虚無僧じゃ、まんざら遠慮をしているとも見えぬわい」

一座は興が冷めてしまいました。せつかく呼び込んだ男は一座の手前に多少の面目を失したらしく、

「よしよし、それでは代つて拙者が吹いてお聞きに入れよう。虚無僧、その尺八を貸せ、こう吹くものじゃ」

竜之助の手から尺八を借りて、ふしおもしろ節面白く越後獅子を吹き出した。なるほど自慢だけに、竜之助よりは器用でうま巧いからの、一座の連中はやんやと喝采かつさいします。

「今度は追分を一つ、それから春雨」

調子に乗つて、竜之助の尺八を借りっぱなしで盛んに吹き立てると、それで興の冷めた一座が陽気になつてしまいました。

さんざん吹きまくった上で、ほう抛り出すようにしてその尺八を竜之助に突返して、

「さあ、これがそのお礼だ、その方へのお礼ではない、尺八の

借賃じゃ、取っておけ」

いくらかのお捻ひねりを拵こしらえて竜之助の前に突き出しながら、わざと竜之助の天蓋へ手をかけて面かおを覗き込もうとする、その手を竜之助は払いました。

竜之助のは正式に允可いんかを受けた虚無僧ではないのです。虚無僧となつて歩くことが便利であつたからそうしたので、これはその前から流行はやつたことで、その真似をしていたのに過ぎないのだから、氣の向いた時は吹き鳴らし、氣の向かぬ時は吹かず、今までも町道場や田舎いなかの豪家で劍術の好きな人の家に一晚二晩の厄介になつたことはあるが、まだ路用に事は欠かないし、尺八の流しによつて人の報謝を受けたことはなかつたのです。それに今こういう取扱いを受けた竜之助は、

「いや、お礼には及び申さぬよ、尺八をお貸し申した代りに、

こつちにもちつとお借り申したいものがある、お聞入れ下さるまいか」

「煙草の火でも欲しいのか」

「あの竹刀しなひを一本お借り申したい」

「竹刀を？ それは異いな望み、虚無僧が竹刀を持って何をす  
「お前の頭を打つてみたい」

ああいけない、こんなことを言い出さねばよかつた。ここで堪忍かんにんしたところが竜之助の器量が下るわけでもあるまい、またこの人々相手に腕立てをしてみたところで、その器量が上るわけでもあるまいに。さりとて竜之助のは、なにも彼等の挙動しやくが癩しやくにさわつたから、それで恨みを含んでていいる体にも見えません。思うに武術の庭に入つたために、竹刀を見るにつけ、道具を見るにつけ、その天成の性癖ほっほつが勃発して、ツイこんなことになつ

たのでしよう。

「ナニ、頭を打つてみたい？ あの竹刀でこの拙者の頭を？ おのおの方、面白いではござらぬか」

「それは面白い、望み通り竹刀を貸して遣わしたがよかろう」

「それ、望み通り竹刀を一本」

「かたじけない」

竜之助は貸してくれた竹刀を受取つて少し退いて、

「これは軽い」

洗水盤みたらしの石を発止はっしと打つと、竹刀の中革なかがわと先革さきがわの物打ものうちのあた

りがポツキと折れる。

「やあ！」

「これは役に立たぬ、もう一本貸してもらいたい」

折れた竹刀をポンと投げ出す。

「無礼な仕方」

尺八を吹いた武士は怒る。

「おのれ！」

木剣を拾つて、机竜之助の天蓋の上から、脳骨微塵のうこつみじんと打ち蒐かかる。

鳥居の台石へ腰をかけた竜之助、体を横にして、やや折敷おりしきの形にすると、鳥居側わきを流れて石畳の上へのめつて起き上れなかつた男。

「憎にくき振舞ふるまい」

一座の連中のなかには老巧の人もいたけれど、こつちにも落度おちどがあるとはいうものの竜之助の仕打しうちがあまりに面憎つらにくく思えるから、血気の連中の立ちかかるのを敢あえて止めなかつたから、勢込せこんでバラバラと竜之助に飛び蒐かかる。

鳥居の台石からツト立つた竜之助は、いま後ろへ流れた男の投げ飛ばした木剣を拾い取ると、それを久しぶりで音無しの構え。

社の玉垣たまがきを後ろに取つて、天蓋は取らず。

五社明神の境内はにわかのしに大きな騒ぎになつてしまつて、参詣の人、往来の人、罵りのし噪いで立ち迷う。

そこへ仲人ちゆうにんに割つて出でたものがあります。何者かと見ればそれは女。

「まあまあ皆様、お待ち下さいませ」

思いがけないこと、それは妻恋坂の花の師匠のお絹でありました。

お絹の仕えた神尾の先殿せんどのさま様の墓はこの浜松の西来院さいらいいんにあつて、そうしてこの浜松の城下はお絹の故郷でありました。

伊勢参りから帰り、お絹はそのお墓参りをしてここに逗留とまりゆうすることでも久しくなりました。

「危ない、女の身で、引込んでいきつしやれ」

「そんなことをおつしやらないで、お待ち下さいまし」

お絹は竜之助と浜松藩の武士の間へ身を以て入り込んでしまいました。

「さきほどから拝見致しておりますれば、ほんに詰つまらない行きがかり、殿方が命のやりとりをなさるほどのことでもござんすまい、女の身で出過ぎたこととござんすが、ただ通りがかりの御縁、どうぞこの場はお任せ下さいまし。それとも喧嘩をなさるなら、このわたくしをお斬りあそばして、それから後になさいまし。女をお斬りあそばしたところでお手柄にもなりますまい、どうかお任せ下さいまし」

そこへ一座のうちの老巧連が飛んで来て、

「いや、おのおの方も大人げない、旅の者一人を相手にして、勝つても負けても手柄にはなるまい、あとは拙者共に任せるがよい」

そこでこの喧嘩は、無事に引分けとなつてしまいました。

竜之助はそのうちに、消えてなくなるようにさつさと明神の社内を出てしまいました。

続いて社前を出たお絹、しばらく竜之助の後ろ姿を見送つていましたが、伴ともの女中を呼んで、

「お前、あの虚無僧ていねいさんを追いかけて、わたしの家へ来るように言つておいで、丁寧ていねいにそう言つて、一緒にお連れ申しておいで、もし聞かなかつたら、どちらへおいでなさるのですかといつて、その行先を尋ねてごらん、それも言わなかつたら、どこへ泊る

かそれを見届けておいで」

二

その晩、机竜之助とお絹とは、西来院の傍かたわらなる侘住居わびずまいで話を  
するのが縁となりました。

「どちらかでお見かけ申したように思いますよ」

二人の間には火鉢があつて、引馬野ひくまのを渡つて来る夜風が肌寒  
いから、竜之助は藍木綿あいまめんの着衣の上に大柄おおがらな丹前たんぜんを引っかけて  
いました。

「江戸へ帰ろうと思う」

まぶしそうな眼をして、ひとりごと独言のように言う。

「お急ぎではござんすまい」

「別段に急ぎもせぬが」

「それでは、こちらに御逗留なさいませ、わたしも江戸へ帰ろうか、それともこちらで暮そうかと考えているところでございます」

「急ぐ旅でもないが……」

「そうなさいまし……江戸から来てみると、どうも淋しいこと、御覧の通り。ここは浜松も城下を西北に外れておりまして、わけてこの近所はお寺が多いものですから、夜などは墓場の中にあるようなもので、自分ながら、たとえ三日でも、よくこんなところに辛抱ができるようになったかと感心しているのでございます、もう女も、こうして淋しいところが住みよくなるようではすた廃りでございますね」

吉田通れば二階から招く、しかも鹿かの子この振袖で……という

のは小唄にあるが、これは鹿の子の振袖ではない、切髪の被布ひふの、まだ残んの色あでやかな女に招かれたこと。

竜之助は、不思議な女だとも思い、旅の一興とも思う。

その夜はこの女と共にさまさまの物語をして後、十畳の間へ床を展のべてもらつて竜之助は寝る。

その夜、どうしたものか竜之助の頭がクラクラとする。ガバしとねと褥しとねを蹴けつて起き上る。

秋草を描いた襖ふすまが廻り舞台のように動き出す、襖の引手が口をあく、柱の釘隠くぎかくしが眼をむく。

蒲団ふとんの上に坐り直した竜之助は、声を立てようとして舌が纏もつれる。

「まあ、どうかなさいましたの」

その声で竜之助は眼を見開いてホーツという息。

「大へんな魔うなされ方ではありませんか」

再び眼を見開いたつもりであつたが眼に力がありません。蒲団の上から差覗さしのぞいていたのはお絹でありました。

「夢でもごらんになつたのですか、お冷水ひやでもあがつて、気をお鎮めなさいまし」

枕許まくらもとにあつた水指みずさしから、湯呑に水をさしてお絹が竜之助の手に渡しました。顫ふるえた手で竜之助はその湯呑を受取ろうとして取落す。

「おやおや、水をこぼして」

お絹は困つて、片手で何か拭ふくものを探そうとしました。竜之助は、またその湯呑を取り直そうとしました。その二人の手が重なり合つた時に、ハツとしてそれを引込ませました。

「気が落着いたら、ゆつくりお休みなさい、まだおかげんが悪

ければ女中を起しましょう」

「いや、もう大丈夫、お世話になつて相済まぬ」

お絹は竜之助が落着いたのを見て、自分の寢床へ帰つてしまいました。

竜之助の感はいよいよ冴さえて眠れませぬ。

眠れないでいると、一間隔てた次の間で、すやすやとお絹の寢息が聞えます。軽い寢息、吐いて吸う軟やわらかな女の寢息、すういすういと竜之助の魂に糸をつけて引いて行くようです。やあつて寢返りの音。

髪まの毛くらが枕紙がみに触さわる。中指なかざしが落ちたような、畳に物の音、上になり下になり軟らかい寢息。

「眠れぬ、眠れぬ、由よしないところへ泊つた」

竜之助は反側する。にわかには寢息が低くなつて、そして聞え

なくなる。枕許の水を、手さぐりにしてまた一口飲んでみる。  
途絶とだえた寝息がまたすやすやと聞える。

「ああ」

懊惱おうのうした竜之助は、太い息を吐いて仰向けに寝返ると、お絹の寝間で軽い咳せきがする。

「眼が覚めたのかな」

枕許へ何か掻き寄せるような畳ざわりの音。お絹も、どうやら眼が覚めたらしい。

夜具を掻きのけたかと思われる様子で、やがてキューキューと帯を手繰たぐるような音。竜之助の頭は氷のように透きとおる。

襖たきが開く、衣きぬずれの音。

「眠れますか。眠れますまいねえ」

襖の蔭から半身が見える、白羽しろはぶたえ二重に紗綾形しやあやがた、下には色めい

た着流し。お絹は莞爾にっことしてこつちを見ながら、

「わたしも眠れないから、お邪魔に来ましたよ、こんな永い秋の夜を一人で寝飽きるのもつまりませんからねえ。わたしの方へおいでなさいまし、面白いお話を致しましょうよ」

竜之助は悽然せいぜんとして、この女の大膽なのに驚いたが、驚いて見れば何のこと、それはやつぱりあらぬ妄想、感が納まつて夢に入りかけた瞬時の幻覚に過ぎないで、一間へだてた次の間では、お絹の寝息がいよいよ軟らかく波を打つ。

その夜は明けて、翌朝になると、竜之助の眼が見えなくなり  
ました。

机竜之助が東海道を下る時、裏宿七兵衛はまた上方へ行くと見えて、駿河するがの国薩埵峠さつたとうげの麓の倉沢くらさわという立場たてばの茶屋で休んでいました。ここの名物は栄螺さざえの壺焼つばやき。

「お婆さん、栄螺の壺焼を一つくんな」

蝨あまが捕りたての壺焼あまを焼かせて、それをうまそうに食べていると、

「御免よ、婆さん、壺焼を一つくんな」

七兵衛と向い合いに腰をかけた人。銀ごしらえの脇差わきざしを打込ぶっこんだ具合、笠の紐の結び様から着物の端折はしよりあんばい、これもなかなか旅慣れた人らしいが、入って来ると笠の中から七兵衛をジロリと見ました。

「婆さん、いくらだね」

七兵衛は壺焼の代を払おうとします。

「六十文いただきます」

「ここへ置くよ」

七兵衛は百文ばかりの錢ぜにを抛ほうり出して出ると、

「婆さん、いくらだえ」

銀ごしらえの脇差も同じように壺焼あたいの価あたいを聞く。

「四十文でよろしゅうございます」

「ここへ置くよ」

同じく百文ばかりの金を投げ出してこの男が出たのは、七兵衛がもう薩埵峠の上りにかかろうとする時分でありました。

幸いに晴れていて、富士も見えれば愛鷹あしたかも見える。伊豆の岬、

三保の松原、手に取るようであります。七兵衛は海道第一の景色にも頓着なく、例の早足で、すつすと風を切つて上つて行く。

七兵衛をやり過ごして、同じ栄螺さざえの壺焼屋から出た旅の男は、これもすすすと風を切つて上つて行く。七兵衛も足が早いがこの男も足が早い。みるみる七兵衛に追いついてしまいました。

「どうも結構なお天気でよろしゅうございますな」

お愛想あいそうを言つて、つと七兵衛を通り抜いてしまう。

「へえ、よいお天気で……」

と七兵衛は返事をしたものの、さつさと自分を抜いて行く銀ごしらえの男の歩きぶりを見ると癩しやくに触さわりました。この俺を抜いて歩く奴、小面こづらの憎い振舞をしたものかな、よしそれならばこつちにも了簡りようけんがある、七兵衛は足に速力を加えて歩くと、見るまにまた銀ごしらえの脇差を追い抜いてしまいます。

「どうもお天気がようがすな」

七兵衛は、銀ごしらえの脇差を尻目しりめにかけて通ると、

「へい、よいお天気で……」

その男もまた、負けない気で足に馬力をかけました。

二人は、ついに雁行がんこうして歩き出してしまいました。

七兵衛は、妙な奴だと思うから別に言葉もかけず、そうかと  
言つてこうなると抜かれるのも癪だから、ずんずん歩いて行く  
と、その男もまた口を結んで七兵衛と押並ぶようにして歩いて  
行く。

はて、今まで旅をしたが、こんな奴に会つたことがない、別  
に怖こわいことも気味の悪いこともないが、足の早いのが癪だ、そ  
うして、自分に足で戦いを挑いどむような仕打ちがいよいよ癪だ。

しかし、いよいよ峠を下り切るまでこの男は、七兵衛より後  
にもならず先にもならず、ほとんど相並んで歩いて来たが、ほ  
ら、村へ出ると身延道みのぶみち。

「旦那、私はここで失礼を致しますよ、はい、身延へ参詣に参りますもので」

七兵衛に挨拶して法華題目堂ほっけだいまくどうから右、身延道へ切れてしまいました。

七兵衛は、興津おきつの題目堂で変な男と別れてから、東海道を少し南へ廻つて、清水港しみずみなとへ立寄り、そこで小半時こはんときも暇をつぶしたが、今度は久能山道くのうざんみちを駿府すんぶへ出て、駿府から一里半、鞠子の宿まりこしゆくもさつさと素通りすどおをして上へ上へと**のぼ**つて行くのでしたが、ちようど、鞠子の宿の池田屋源八という休み茶屋の前を通りかかると、

「もしもし、それへおいでなさる旅の旦那へ」  
茶屋の中から言葉をかけたものがあります。

「エエ、お呼びなさいましたのは？」

七兵衛ふりかえると、店先でとろろ汁を食べているのは、薩埵峠さつたとうげで競争をしかけた、銀ごしらえの変な男。

「これはこれは」

さすがの七兵衛も、少し面喰めんくらって立ち止まると、

「まあ、おかけなさい、ここは名物のとろろ汁、一つ召し上つておいでなさいまし」

「お前さんは身延へ行くとお言いなすつたが……」

「ええ、身延へお参詣をすましてその帰り路なんでございます」

「冗談じょうだんじゃねえ」

「へへ、それは冗談でございませう、身延へ行くつもりでしたけれども、途中でまた気が変わったものでございませうから」

「そうだろう、それでは俺わしもひとつ、とろろ汁をいただきますしよ

う」

身延へ切れたのは嘘うそ、やっぱりこの変な男も上かみへのぼって行くものでありました。それにしても早い、自分がちよつと清水港で用を足している間に、本街道を早くもかけ抜いて、ここできろろ汁を食っているのだから、七兵衛もなんだか一杯食わされたような気持がするのでありました。

「これから名代なだいの宇都谷峠うつのやとうげへかかるのでございますから、草鞋わらじでも穿はき換えようじゃあございませんか」

「そうしましよかな」

二人はとろろ汁を食べて、草鞋を穿き換えて、いざ、とこの茶店を出立しました。

「ずいぶんお達者な足でございますな」

「お前さんもかなり達者なことですね」

「どちらからおいでなさいました」

「俺わしは甲州からやって参りました」

「今晚はどちらへお泊りで」

「いえ、その、まだ……」

「浜松あたりはいかがで」

「なるほど、浜松までエエと」

「浜松まで、これからざつと二十里でございますな」

「二十里、なるほど」

「大井川と天竜川の渡し、こいつが、ちつと手間が取れましよう」

「なるほど」

「なあに、手間が取れたら、徒かちでやつつけるんですな、雲助が追っかけたら逃げる分のことで」

旅には慣れきつたような男であります。七兵衛は、こいつ人を呑んでかかっていると思つたから、

「時に、お前さんは何御商売ですね」

「ハハハハ」

銀ごしらえの男は、ワザとらしい高笑いをして、

「まず、お前さんと同商売かね」

「なに、俺と同商売？」

「ハハハハハ、まあ急ぎましょう」

ハハハと笑つて口をあいて見せた齒並はなみが、ばかに細かくて白い。歳としは、そうさ、七兵衛よりも十歳とおも若いかな、笠を取つて見たら、もつとずつと若いかも知れない。

いよいよ変な奴と七兵衛は思いました。

こうして二人は、鞠子まりこの本宿ほんじゆくから二軒家にけんや、立場たてばへは休まずに

うつのやとうげ  
宇都谷峠の上りにかかりました。

「旦那、ここらで一ぷくやつて参りましょうかね」

銀ごしらえの脇差が腰をかけたのは名代の猫石、木ぶりの面  
白い松があたりに七八本。

「どうも大変なところへ連れ込まれた」

七兵衛もまた大きな石へ腰をかける。

「これが古えいにしの蔦つたの細道ほそみち、この石が猫石で、それ猫の形をして  
いましょう、あれが神社じんじやだいら平」

「なるほど、本街道はたびたび通るが、蔦の細道というのはこ  
れが初めてだ」

「時に親方」

銀ごしらえは改まった言葉つき、旦那と呼んでいたのが親方

になりました。

「何だ」

「仕事の一つあるんだが、付合ってもらいてえ」

「仕事？ 品によりや付合わねえもんでもねえ、言ってみねえ」  
銀ごしらえの眼と七兵衛の眼がピッタリ合う。

「こういうわけなんだ」

銀ごしらえは、吸いかけた煙草を掌てのひらではたいて、それを筒つつに

納めながら、

「小天竜こてんりゅうを渡るとそれ、中の町というのがある」

「うむ」

「京と江戸とのちようどあそこが真中で、ドチラへも六十里と  
いうところよ」

「そんなことも聞いている」

「その小天竜と中の町の間大きな寺があらあ」

「なるほど」

「天竜寺という名前だけは知っていらあ、宗旨しゅうしは何だか知らねえ」

「それがどうしたんだ」

「その寺へ今夜仕事に入りてえと、こういうわけなんだ」

「ケチな仕事じゃあねえか、寺を荒すくれえなら……」

「まあ待てよ、そこにはまた種たねと仕掛しかけがあるんだ。その天竜寺という寺へよ、この三日ばかり前から遊行上人ゆぎょうしやうにんが来ているんだ」

「ゆぎょう上人ていのは何だい」

「藤沢の遊行上人よ」

「なるほど」

「そいつをひとつおどかしてみてえと、こういうわけなんだ」

「遊行上人をかい。お前、遊行上人というのは大したものじゃねえか、小栗判官おぐりはんがんのカラクリで俺もうすうす知っている。しかし、どつちにしたところで坊さんは坊さんだ、逆さに振ってみたところで知れたものじゃねえか」

「それはそうよ、なにもこちとらが遊行上人を逆さに振ってみようとは言わねえ、その上人をめあてに集まる近国の有象無象うぞうむぞうども、そこに一つの仕組みがあるんだ、上人は上人でお十念じゅうねんを授けている間に、こちとらはこちとらで自分の宗旨を弘める分のことよ」

「なるほど」

「まあ、来てみねえ、仕事がいやならいやでいい、おたがいに足並みはわかったから、これからお手並み拝見というところだ。俺おいらのお手並みが見てもれえてえから、それでわざわざお前さ

んに毒を吹っつけたのだ。さあ、日のあるうちに浜松泊り、それからゆつくり天竜へ逆戻りをして一仕事」

七兵衛は承知をしたともしないとも言わずに、直ぐまた変な男に連立って、つた 蔦の細道を下って湯谷口から本街道へ出て西を指して急ぐ。変な男に名を聞くと、「がんりき」と呼んでもらいたいと言う。二人はあまり口を利きかず急にだが、かなやざか 金谷坂あたりでが、りき がんりきが、

「鼠小僧という奴は面白い奴よ、姫路の殿様の近所にやつぱり大きな殿様のお邸があつて、そこでお能舞台が始まつている時のことだ、殿様がこつちから見てみると、舞台の真中に、年のころ十八九ばかりで月代さかやきの長く生えた男が伊達模様の单衣物ひとえものを着て、脇差を一本差して立っているのを殿様が見咎みとがめて、あれは

何者だ、ついに見かけない奴、不届きな奴、追い出せとお沙汰がある、家来たちが見ると、お能役者のほかに人はいない、殿様はなお頻しきりに逐おい出せ逐おい出せとおつしやる、仕方がないから舞台へ上つて追う真似をしてみたがなんにもいやしない、そのうちに舞台の上を見ると紙片かみきれが落ちてゐる、拾つて見るとそれに『鼠小僧御能拜見』と書いてあつた、殿様の眼にだけはその姿がちらついたんだが、ほかの者には誰も見えなかつた。悪戯いたづらをしたものよ」

こんなことを話し出しているうちに、金谷かなやから新坂しんざかへ二里、新坂から掛川かけがわへ一里二十九町、掛川から袋井ふくろいへ二里十六町。

そこでまたが、んり、きが、

まつだいらすおうのかみ

「松平周防守というのは大阪のお奉行様であつたかな、その周防守のお邸が江戸にあつて残つてゐるのは女ばかり、そこへ附

け込んだ鼠小僧、女ばかりのところを二度荒したつてね。一ぺんは、ながつばね長局の部屋という部屋の障子へ一寸ぐらいずつの穴があけてあつた、そこからいちいち覗いて見たもんだね。一人の女中の部屋では鼈甲べっこうの笄こうがいや簪かんざしをみんな取り出して綺麗に並べて置いて、銀簪ぎんざしなんぞは折り曲げて並べて行つたとね。周防守のお妾めかけさんの部屋ではたんす箆筒むらさきちりめんから紫縮緬むらさきちりめんの小袖を取り出して、それをつばねざかい局境の塀の返しへ持つて行つて押拵おっぴろげて張つておいたそうだが、それで金銀は一つも盗られなかつたとやら。いや、何を取られたか知れたものじゃない、ハハハハ」

白い細かい歯並を見せて笑う。七兵衛をして、こいつがその鼠小僧ではあるまいかと思わせるくらいに、ちよつとすじみ凄味の利しろものく代物。

袋井から見附みつけへ四里四町、見附から池田の宿、大天竜、小天

竜の舟渡も予定通り日の中に渡つて中の町。

「あれが天竜寺」

横目に睨んで浜松の町へ入る。

「いよいよ浜松だ、日本左衛門で売れたところよ。日本左衛門

という奴は、また鼠小僧とは貫禄が違ふ、あの大将は手下に働

かせて自分は働かず、床几しょうぎに腰をかけて指図さしずをしていたもんだ。

平常ふだん、黒羽二重の紋付を着て、雑色ぞうしきは身に着けなかつたという

気象だ。鼠小僧はこちとらに毛の生えた質たちの奴で、子分を持た

ずに一人で鼠のように駆け廻つた男だが、日本左衛門は虎にな

りそこなつた大物おおものだ、乱世ならば一国一城の大名になり兼ねね

え奴だ」

こんなことを言いながら浜松の町を真直ぐに通つて、

「広いようで狭いというのがこの土地だが、それでも町の長さ

は二十八丁あつて、家数は三千からある。さあ、ここらで泊るとやらかそう」

てんま町へ来て大米屋おおとめや一郎右衛門とある宿屋へ着く。

牛に曳ひかれて浜松まで来た七兵衛。さて数えてみれば、薩埵峠の前を別にして、あれからでも約三十里の道。

湯から上つた七兵衛、

「が、ん、り、き、さん、天竜寺の一件はどうしたい」

腰を落着けて飲んでいたが、ん、り、き、

「今夜は駄目駄目、明日のことだ」

七兵衛も坐り込んで二人飲みながらの話。どこの部屋に、どんなのがいて、あれは景気は好きそうだがその実懐ふところ中に金はあ  
るまいとか、こちらの方に燻くすぶつている商人てい体の一人者は、あれ

でなかなか持つていそうだとか、あの夫婦者は実は駈落者かけおちものだろ  
うとか、この宿屋の客の値踏みねぶみをがんだりきと七兵衛がする、ど  
ちらも商売柄、その見るところがたんとは違わない。最後になが  
り、きが、

「そのなかで、俺の眼の届かねえのがたった一つあるが、お前  
はどう思う」

「うむ、二階の二番のあれだろう」

七兵衛の返事、おたがいの合点がってん。

「どうもあいつはわからねえ」

「俺にもわからねえ」

「よし、もう一ぺん確かめて来る」

がんだりきは便所へ行くようなふりをして、いま噂うわさに上った二  
階の二番の前をなにげなく通つて前後を見廻してから、そいつ

と障子の傍へ立寄ると、持っていた太い針のようなものを管<sup>な</sup>めて些<sup>ちか</sup>やかな穴を障子の隅へあけて、部屋の中を覗<sup>のぞ</sup>きます。

十畳の間、真中に紙張<sup>しちよう</sup>が吊つてあつて、紙張の傍に朱漆<sup>しゅううるし</sup>、井桁<sup>いげた</sup>の紋をつけた葛籠<sup>つづら</sup>が一つ、その向うに行燈<sup>あんどん</sup>が置いてある。

やがてまたもとの部屋へ立戻つたが、んりき。七兵衛が待つて  
いる。

「どうだ、当りがついたか」

「駄目だ、やつぱりわからねえ、紙張の中に人がいるのかいねえのか、その見当もむずかしい」

「そりやいる、人はいるにはいるがな」

「さあ、その人が男か女か、若い奴かまた老人か、それがわかるか」

「そりや男だ」

「男なら幾歳いくつぐらいで、侍か町人か、または百姓か職人か」

「そりゃ侍よ」

「はてな、それではあの葛籠つづらを何と了簡りょうけんした、井桁の朱漆の葛籠よ」

「あの中か、ありゃあ女物よ、あの中には女物が入っている」

「えらい！ よく届いた。葛籠の中には女物かねめで金目の物が入ってる、そうしてみると、いよいよわからなくなる」

「それを今、俺も考えているところだ、紙張の中に武士がいて、紙張の外には女物の葛籠ということになると、この判じ物がむずかしい」

「第一、わざわざ紙張を吊らせて寝るということからがおかしいけれど、あの寝様ねさまを見るがいい、ああして壁へも障子へも寄らず真中へ寝たところが心得のある証拠だ、ただものでは無えね」

「どうだ一番、あの紙張の中と、葛籠の中、鬼が出るか蛇じやが出るか、俺とお前の初はつのお目見得めみえにはいい腕比べだ、天竜寺の前芸まえげいにひとつこなしてみようじゃねえか」

「そいつもよかろう」

「それでは籤くじだ」

が、ん、り、き、は、早、速、紙で籤をこしらえる。七兵衛が短いのを引いて、が、ん、り、き、が、長、い、の、を、引、く。それでが、ん、り、き、が、ニ、ツ、と、笑、つ、て、

「兄貴、それじゃお先へ御免ごうむを蒙るよ」

「しつかりやつてくれ」

「まだ早いな」

また一口飲んで、蒲団ふとんを敷いてもらって、二人は寝込んで夜の更ふけるのを待っています。

が、ん、り、き、が夜更けて再び忍んで行つた時に、かの部屋の燈火あかりは消えていました。障子の外で暫らく動静を窺つていたが、ん、り、き、暫らくすると音もなく障子があいて、が、ん、り、き、は部屋の中へ入つてしまいます。

身を畳の上に平蜘蛛ひらぐものようにして、耳を澄まして寢息を窺つたが、紙張の中に人ありやなしや。

が、ん、り、き、の眼は闇の中でもよく物が見えます。それはが、ん、り、き、に限つたことはない、盗みをなす人は大抵は皆そうであるはずです。

畳の上に吸いついて紙張の中を見ていることやや暫く、どうしてもが、ん、り、き、に判断がつかぬ、合点がてんがゆかぬ。

彼も七兵衛との話の模様では、一ぱしの盗人であらうけれど、

紙張の中が何者であるか、起きているか醒めているかさえ、どうしても合点がゆかない。それを知るべく小半時こはんときを費ついでしてしまつたのですがついに解決がつかないで、そのまま蟻ありの這うように井桁いげたの葛籠つづらの方へ寄つて、やつと片手をその葛籠へかけました。が、がんりきは腹はらば這いながら、左の片手を井桁の葛籠の一端へかけたが、かけたなりで、また暫くじつとして紙張の中の動静を窺うかがう。

紙張の中は、やはり静かであつて、ウンともスウとも言わぬ。それからまた身体からだをずっと乗り出して、葛籠の紐ひもへ手をかける。蟻いもむしが芋虫をひきずるように、二寸ばかりこつちへ引き出しました。

「占めた」

紙張の中には誰もいないのだ、いるにしても死んでるか眠つ

ている。が、ん、り、き、は、モウ占めたとばかり、ずいと葛籠を引き寄せること一尺。この時、紙張の裾が、扱しごいたようにグツと鳴る。

が、ん、り、き、は、ついと飛び退のいた。一尺余りの白刃が、紙張の裾から飛び出して、が、ん、り、き、の眼と鼻の上を筋違すじかいに走って、そうしてその切尖きっさはガツシと葛籠の一端に当る。

ついと飛び退いたが、ん、り、き、。その時は、もう白刃は紙張の裾に隠れてしまつて、紙張の中は前と同じように音もなければ声もない。

二尺ばかり飛び退いたが、ん、り、き、はそこで脇差の柄つかに手をかけて、いま白刃の飛び出した紙張の裾と、葛籠の間を見ていること半時ばかり。いつまで見ていても紙張のうちには前と少しも変らない。が、ん、り、き、の方もまた、最初しから終しまいまで一言ひとことも立てな

いのであります。

紙張と葛籠を相手に妙な暗闘、とうとうが、んりき、の精根せいこんが尽きたと見えて、ジリジリと退却、紙張と葛籠を睨めながら、脇差に手をかけたなりで、あとじさりに敷居を越えて、ついに部屋の外へ出てしまいました。それでも感心に障子は元通りに締めにおいて、

「降参、降参」

「どうした」

狸寝入りたぬぎねいをして待っていた七兵衛の枕許へ来たが、んりき、そこで兜かぶとを脱ぐ。

「とても俺の手には合わぬ、兄貴いくなら行ってみろ」

「弱い音ねを吹くじゃねえか」

七兵衛は起き上る。七兵衛も寝ながら後詰ごづめの身ごしらえして

いたが、が、ん、り、き、か、ら、い、ま、忍、び、込、ん、だ、様、子、の、首、尾、を、逐、一、き、い、て、  
「なるほど、そりゃいけねえ、こつちよりたしかに一枚上だ、  
せつかくだが、俺もやめる」

七兵衛は身仕度を解ほぐしはじめる。

「チエツ」

が、ん、り、き、は、舌、を、鳴、ら、し、て、

「このままで引込むのも業腹ごうはらだ、明日になつたらひとつ正体を  
見届けての上で、物にしなくちやならねえ」

「天竜寺の方は、どうする」

「そりゃ後廻し」

二人はこうして寝込んでしまう。今度はほんとうによく眠り  
つづけて、翌朝、ほかの客よりもおそくまで眼が覚めませんでした。

その翌朝、大米屋の前へ二挺の駕籠かごが止まると、主人や番頭が飛んで出て頭を下げました。

ほどなく二階の二番の部屋から女中に手を引かれて静かに出て来た人、が、んりきと七兵衛が多年の老巧を以てしてついに何者であつたか見抜けなかつた人。

女中に手を引かれて歩いて来ても、やっぱり何人であるかはわからない。それは黒の井桁いげたの紋付の羽織と着物を重ねていたが、面かおと頭くうちりめんは黒縮緬ずきんの頭巾で隠していたから。

女中に手を引かれたのは眼が不自由なためらしい。そうして、脇差を差して刀を提げて、悠々と店先まで出て来ると、駕籠の垂たれが上つてその中から姿を見せたのはお絹。

駕籠につづいて馬が来る、その馬には明荷あけにが二つ、いずれも

井桁の紋がついている。そうすると、二階から下ろされたのは、  
ゆうべ問題になった朱漆の井桁の葛籠つづら。

二つの駕籠が勢いよく乗り出すと、つづいて葛籠を載せた馬  
の鈴の音。

「見たかい」

「見た」

「あやつは盲目めくらだぜ」

「盲目だ」

「後ろの駕籠を見たかい、後ろのを、あの女を」

「その女が、俺の知っている女だから不思議だ」

七兵衛はこう言う。

「兄貴、あの切髪の女をお前が知っているのかい」  
「が、ん、り、き、が、不、審、が、る。」

「知っている、たしかに知っている、言葉をかけようと思ったが、かけちゃあ悪かろうと思つてかけなかつた」

「そりゃ乙だ。<sup>おつ</sup>してみりゃあ、前の駕籠へ乗つた奴の当りもついたらうな」

「そりゃ、やつぱりわからねえが」

「なんしろ近ごろ好い鳥がかかつた、おおかた今夜は掛川泊りだろう。兄貴、仕度は出来たかい」

二人は、もうすっかり旅の用意が出来た上に朝食まで済んでいるのでした。

#### 四

それと同じ日の夕方のこと。

どこから来たか西の方から来て、浜松の町を歩んで行く一人の子供がありました。

「かわいそうに、あの子供は跛足びっこだね」

それは撞しゅもくづえ木杖を左の脇の下にあてがって、頭には竹笠たけがさを被かぶつて、身には盲目めくらじま縞つそでの筒袖あわせの袷あわせ一枚ひっかけたきりで、風呂敷包を一つ首ゆわねつこに結ゆわいつけて、それで長の道中をして来た一人旅の子供と見えるから、それで町のおかみさんたちも、おのずから同情の眼を以て見るようになったものと見えます。

しかし悪太郎どもは悪太郎どもで、

「やい、跛足びっこが来た、あれ見ろ、跛足のチビが来やがった」

古草鞋ふるわらじを投げたり、石を抛ほうつたりして、

「こつちを向いて睨つらみやがった、おい、あの面つらを見ろ、ありや子供じゃねえんだぜ」

なるほど、悪戯いたずらをしかけた悪太郎どもの方を睨みつけた旅の子供の面を見れば、決して子供ではありませんでした。

「かわいそうに、あの子供は跛足だね」とせつかく同情を寄せた町のおかみさんたちまでが、笠の下からその面を見た時には呆あきれてしまつて、

「おやおや、あれは子供じゃなかつたんですね」と言いました。

笠を被こつたなりで見れば子供に違ちがひないけれど、笠の下からその面を見れば、子供ではないのです。

「なんだか河童かっぱみたような、気味の悪い」

これは子供でもなし、また河童でもなし、宇治山田の米友よねともで  
ありました。

通るところの人々から同情されたり侮蔑ぶべつされたりしながら、

米友は伊勢の国から、ともかくもここまで、その一本足で歩いて来たものであります。一本の足が折れて使えなくなつたけれども、米友の敏捷びんしような性質は変ることはなく、かえつて他の一本の足の精力が、他の一本へ集まつて来たかと思われるほどで、しゅもくづえ撞木杖を上手に使つてピョンピョン飛んで歩くと、普通の人の足並には負けないくらいの早さで歩いて行かれるようであります。

「帯屋七郎左衛門、なんだか御大層ごたいそうな家だ、俺おいらの泊る家じゃねえや」

米友は今夜泊るべき宿屋を探しているものと見えます。

「鍋屋三郎兵衛、こいつも俺おいらの齒には合わねえ」

大きな宿屋の看板を見てはいちいち排斥して歩いて行く。

「大米屋一郎右衛門」

これはがんりきや七兵衛が、駕籠と馬のあとを追うて今朝出て行つた宿屋。

「これもいけねえ」

米友は身分相應な木賃宿きちんやどかなにかを求めているのだが、それに合格するのがついに見出せないで、浜松の城下をほとんど通りつくしてしまいました。

広いようで狭い浜松の町はここで尽きて、米友の身は馬込川まごめがわの板橋の上に立っていました。振返ると、浜名の方に落ちた夕陽ゆうひが赤々として、お城の方の森蔭にうつっています。

「ああ、今夜も野宿のじゆくかな。これからまもなく天竜川の渡し、そこへ行くまでの間で、社やしろかお寺の庇ひさしの下をお借り申さなくちやあならねえ。それとも夜通し突っ走つて、行けるところまで行こうかしら」

なわてみち

米友は思案しながら松並木を歩き出して、天神町の立場たてばから  
噺道なわてみちを、宿になりそうなところもがなと見廻しながら行くと、  
ほどなくやぐら、新田というところあたりへ来てしまいました。

「何だい、あそこで大へんな燈火あかりがする、御縁日ごえんにちでもあるのか  
な」

東へ向つて左手の方、五六町も離れて少し小高くなつたところ  
に、大きな屋根が見えてあつて、その周囲に町が立つていま  
す。

「行つてみよう」

米友はそこへ杖を枉まげて、

「なるほど、大きなお寺だ。御縁日なんだな。よしよし、この  
お寺の裏の方にどこか寝るところがあるだろう」

表の方は人が雑沓ざつとうしているけれども裏の方は誰もいない。表

の方は昼のような明るさであつたが、裏の方は真闇まつくら。

米友は裏から廻つてこつそりと本堂の縁の下へもぐり込んでしまいました。蜘蛛くもの巣を分けながらちようど須弥壇しゆみだんの下あたりのところへ来て見ると、いいあんばいに囲いになつて身を置くようなところが出来ていましたから、そこへ荷物を卸おろして、「やれ安心、これでようやく今日の旅籠はたごがきまつた」

米友はそこに納まつたが、頭の上は本堂の広間、いっぱいの人で埋まつているような様子。階段から庭、庭から海道筋の方へかけては、人の足音がしきりなく聞える。

本堂の中にはいっぱいの人が集まつているようだけれども、そのわりあいには静かであります。そうして時々、南無阿弥陀仏なむあみだぶつ、南無阿弥陀仏という声が海嘯つなみのように縁の下まで響いて来ます。

このお寺は、が、ん、り、き、や七兵衛がめざして来た天竜寺でありました。いま本尊の側わきの高いところで説教をしている六十ばかりの、至極や痩せた老体がすなわち遊行上人ゆぎようしようにんなのでありました。

鼠色ねずみいろの、ずいぶん雨風を浴びた袈裟衣けさごころもをかけて、帽子を被り珠数じゆずを手首にかけながら、少しく前まへこごみになって、あまり高い音声おんごうではないが、よく透とおる声で、

「さいぜんも申す通り、我等われらが境界きやうがいは跣足はだし乞食こじきと同じ身分身分じゃ。それにまたこんなに紫の幕を張つて、御朱印ごしゆいんつきで旅をするといふのは我等の心ではない、お役人がそうしてくるから、そうしている分のことよ。決して我々を、上人だの名僧だのといつて有難ありがたがつてはいけぬ。こうして旅をして歩いて、どこでバツタリと倒れて死ぬかわからぬ身じゃ、なんの我等に貴いところがありません。ただただ念仏往生の道を守るのみじゃ。さあ

さあ、お望みとあらばこれから名号みょうごうを授けて上げる。それじゃというて、これだけの人数が一度に押しかけられたのではわしがたまらぬ、そこへ木戸こしらを拵こしらえておいたから、先に来たものから争わずに、こちらへ一人ずつ入つて来なさるがよい」

遊行上人はこういつて、座右ざうの箱に入れてあつた名号の小札ひとつかを一掴むぞうさみ無造作むぞうさに取つておしいたたくと、肩衣袴かたぎぬばかまを附けた世話人が、

「さあさあ、皆さんや、これから上人様がお手ずからお名号をお授け下さる、結縁けちえんのお方はこれより一人ずつお通り下さい、お受けになつたお方は、あちらからもとのお席へお直りなさるよ  
うに」

静粛なもので、三尺ほどの入口から順々に上人の前へ出て名号をおしいただいて、一廻りしてもとの席へ戻つて来るのに、

みんな一応お先へお先へと言つて辞儀じぎをしました。

「さあさあ、お持ちなさい、お持ちなさい」

上人の言葉つきからお授けぶりが、いかにも気軽であります。

名号を受ける人は、老若貧富ろうにやくひんぷをおしなべて少ない数ではありませんでした。一生に一度こんな貴い上人のお手ずからの名号をいただく冥加みやうがの嬉しさ、これが罪障消滅ざいしょうしょうめつ、後生安楽ごしょうあんらくと随喜の涙にくれているものばかりであります。

「お前は少しお待ち」

いま上人の前に出た五十ぐらいの頑丈がんじょうな男、その男には上人が容易たやすく名号を渡すことをしませんでした。

「お前は、もと船乗をしていたらうな」

「はい、左様でございます」

頑丈な男は額へ手を当ててお辞儀をしました。集まった人は

何事かと思ひました。

「その船乗をしていた時に、難船に逢つて死んだ者がある、その金をお前は取つて遣つたらうな」

「へへへ、へえ」

五十男はしどろもどろになりました。

「そうしてお前はまだついで、その人の菩提をとむろうたことがない、その罪があるによつて、お前にはこの名号を授けたところで往生は覚束ない」

一座はこの時に、しーんとしてしまいました。

五十男は慚じ入つて下を向いてしまつてゐるのを上人は、

「さだめて今お前の身には、骨節がところどころ痛むであろうな、終いには身体が腐つてしまふぞ。それが怖ろしいからこゝへ来たものであろうが、まだまだ罪が消えてはいないによつて、

あちらへ行つてゐるがよい」

この時、当人のほかに一人、この席の一隅へまき紛れ込んで様子を見ていた男が、きまり悪そうに肩をすぼめました。それはが、んりきでありました。

が、んりきは、席の隅に小さくなつていたが、上人の船乗に言つた言葉が、なんだか自分に当るように思われて肩をすぼめ、横を向いてしまいました。

が、んりきが胸を打たれた次に、

「お前さんには二枚上げる」

上人は、その次に来た若い婦人にはみょうごう名号の札を二枚やつたのであります。

「有難うございます、有難うございます」

女はおしいただいて次へ通つて行く。が、んりきの傍で人の話、

「あれは身持ちなんだよ、あの女は身持ちのおかみさんだ、上人様にはどうしておわかりになるか、わたしどもが見たんでは、まだ様子ではわからないうちに、上人様はちゃんとお見分けなされて、身持ちの女には必ず二枚ずつをお授けなさる」

が、ん、り、き、は、それと聞いて、いよいよ煙けむそうな面かお。

その次には、おそろしく衣裳いしやうを飾かつてお化粧ちようかをした町家の年増としま。

「おやおや、あれは浜松の酒屋のお妾さんだが、どうして信心ごころが起つたらう、大へんにめかし、込んで来たが」

その女が上人の前へ出ると上人が、

「ああ、お前の身には不浄ふじようがある。それを洗つて来なければお札は上げられない」

女は真赤になつて俯向うつむいてしまいました、やがて何か気が

ついたらしく、

「ああ、どうも済みませんでございました」

気軽に上人の前を辞して、暫くたつて庫裡くらりの方へ引返しなごら、

「ほんとうにどうも、上人様の前へはうつかり出ることとはできません。わたし今日、何の気なしにいつもの通り白粉おしろいを塗る時、たまご鶏卵の白味を使ったものですから、それで上人様が不浄があるとおっしゃいました。それ故、お湯に入つてこの通り素面すがおになつて参りました」

どこで湯に入つて来たか白粉をすっかり洗い落して、再び上人様の前へ出ると、上人はなんとも言わずに札を授けてやりました。

それから何人もずんずんと進行していききましたが、あとから

あとからと詰めかける人で、いくら静かにしても自然、押合いの気味になります。上人は、また一人の男に向つて、

「これこれお前は、どうも穀物渡世こくもつとせいをしているようだが、榘目ますめを削けずつて金銭を貪むさぼるような様子が見える。その日その日の暮しを立てる食物の、量を削おのつて己れを肥こやそうとするような者には往生はできぬ、心を改めて出直しなさい、今日はお札は上げられぬ」

その男は苦にがい面をして恐れ入りました。

「そらごらんなさい、あれは中の町で松屋といつて、饑饉ききんどし年から太らせた米屋だ、心を改めて出直しなさいと言われつちまつた、そうなくちやあならねえ」

「えらいもんですな、上人様がなにもこの土地に居ついておいでなさるわけじゃなし、当人がそれを喋しゃべるわけじゃなし、それ

でちやあんと掌てのひらを指すように言い当てておしまいなさる、あれが仏眼ぶつがんというものでございますな。ああなると神通力じんずうりきを得ておいでなさるから、とても外面うわべだけを飾つて出たところで仕方がありませんな」

「そうですね、ああいうところへは馬鹿は馬鹿なりに、悪人は悪人なりに、正しょうのまま持つて行つてお目にかけるよりほかは仕方がござんせんな」

「どうです、おたがいがまあ、ああ言つて人の前でスパスパすつぱぬきをやろうものなら忽たちまち大事が持ち上つてしまいますな、白粉を薄くつけようと厚くつけようと大きなお世話だ、なんて啖たんか呵かを切られた日には納まりがつきませんな。それをどうです、大勢の前でスパスパとやられて一言いちごんもなく恐れ入つちまうなんぞは、人徳にんとくというものは大したものですな」

「心の出来た人ほど怖ろしいのはござんせん。あれでお前さん、上人様は御自分では跣足乞食はだしこじきと同じ身分だとおっしゃって、ほんとうに乞食同様な暮らしをしておいでなさるんだが、將軍様であろうとも公卿くげさまであろうとも、私共と附合うのと同じようにしておいでなさる、ああなると貴賤貧富がみんな同じことにお見えなさるんだね」

「さあ参りましょう。私共なぞもお札がいただけるかいただけな  
いか、とにかく正しやうのままをお目にかけてお願い致してみましょ  
うでございます」

隠居さんのようなのが一人立ちかけて、ふと懐中へ手を入れ  
てみましたが、

「おや」

「どうかなさいましたか」

「たしかに持つて参つた懐中物が」

「お懐中物が？ それはそれは」

「おやおや、私も大事な紙入が……」

「あなたも？」

「あれ、わたくしの簪かんざしがどこぞに落ちておりは致しませんでし  
うか」

が、んりきの周囲まわりで、あちらにもこちらにも紛失物の声があり  
ましたので、四辺あたりがにわかぶつそに物騒ぶつそになります。

坐つていたものまでが総立ちで騒ぐと、事がいよいよ穩おだやか  
なくなつて、おたがいの眼つきになんとなく疑いの色がかかる  
から、皆々いやな気持がしてしまいました。

「御用心をなさいまし、よくない奴が入り込んでいるようです  
から」

「何です何です、泥棒ですか、早く掴つかえておしまいなさい」

それでいよいよ騒ぎが大きくなると遊行上人が、

「ああ、これこれ静かに。何かまたよくないことをするものがこの席へ入り込んだと見える、わしがよく見て上げるから静かになさい」

この一言で騒ひとごとぎが静まると、上人は一座をずうつと見廻したが、その眼ががんにりきの面の上へ来てハタと止りました。

上人の眼は眼光爛らんらん々というような眼ではありません。眉毛まゆげの下から細く見えるくらいの眼でしたが、ずっと席を見廻すと、がんにりきのところへ来て上人の眼がハタと留まりましたものですから、がんにりきはまたギクツとしました。

そこで上人はこう言いました、

「人の欲しいと思うものを取ったところで、それは己おのれの福分ふくぶん

にはならぬものじゃぞ。金が欲しいならば、この集まりが済んでから、わしのところへ相談に来てみるがよい、多分のことはできまいが、いくらかの都合つじょうはして上げる、人の物を盗むというのはよろしくない。さあ、この席のことはこの席限り、昔犯おかした罪でも、神妙に懺悔ざんげをすれば仏様が許して下さる。今日はこれおたがいごしやうおうじやうが、後生往生のためというて集まったこの席で、人の物を盗ろうというものは、よくよくお気の毒しやうな性に生れついたものじゃ。盗った品はここへ出しておしまいなさい、今も申す通り、この席のことはこの席限り、盗られた人も許して下さるであろうし、盗った方もたちどころに罪が消えるのじゃ」

こう言つて、しーんとした席を見渡す、見渡すのではない、が、んりき、一人の面だけを、じつと見詰めておられるようにしか思われませんか、さしもの、が、んりきは、なんとなくまぶしく

なつて、面を上げていられないで俯向うつむいてしまいました。

上人からこう言われて、誰か名乗つて出るだろうと、一座はいよいよ静かになつてゐるが、いつこう名乗つて出るものもありません。

そのうちにかんりきは、そーつと後ずさりをして人混ひとごみに紛れまぎて扉わきの側からこの席を抜け出でようとすると、上人が、

「世話人衆」

と世話人を呼びました。

「へえ」

かたぎぬぼかま

肩衣袴かたぎぬぼかまをつけた世話人が上人の前へ出て頭を下げると、

「今あの扉の外へ出ようとするとする男、あの男をちよつと呼び止めてこれへつれておいでなさい」

「へえ」

世話人と警衛の者三四名、人を分けてバラバラとがんだり、きの傍へ寄つて来る。それと見て近くにいた人も立ち上つてがんだり、きの袖そでを控えて、

「まあお待ちなさい」

「何をしやがる」

がんだり、きはその男を突き飛ばすと四辺あたりはまた総立ち。

「盗賊どろぼう！」

がんだり、きを取押えようとかかるのを、

「ええ、小癩こしやくな真似をしやがる」

二三人を手玉に取つたがんだり、き、扉から欄干らんかんを一足飛びに縁の敷石の下まで飛び下りた身の軽さ。どこと行って逃げ場所がないから、がんだり、きは縁の下へ逃げ込んでしまいました。

警護の侍たちや参詣の群衆は直ぐに縁の下へ追いかけてました

が、それに捉つかまったのは運悪く、が、んり、きでなくて米友でありました。

米友は旅の疲れで、ついうとうとと眠りかけているところを、遮しやにむに二無二折重なつて、

「いた、いた」

「な、な、なにをするんだい」

寄つてたかつて米友を縁の下から引張り出したのであります。別に悪いことをしたわけでもないからと思つて米友は、別に抵抗もせず引き出されて来たのであります。明るい所へ出して見ると、

「おやおや」

取捉とつかまえた連中も少し呆あきれ面がおです。いま追いかけたのは、もつと身のこなしが人間らしい男であつたが、これは子供、子供の

ように見える大人、大人のように見える子供。

「こりや違う」

誰が見ても米友とほかの人とは一見して区別がつくのであります。

「同類の者であろう」

違つたとはわかつたけれども、それでも厳きびしく押えて逃がそうとはしません。

「それ、遠く逃げないうちに、もう一度探してみろ」

米友は米友で押えておいて、またが、ん、り、き、を探しにかかる。いつまでまごまごしているものではない、が、ん、り、き、の姿はどこを尋ねても見えるものではありませんでした。

「とにかく、そいつを引括ひっくれ」

役人は米友を縄なわにかけようとする。

「おや、俺らおいを縛るのかい、なんで俺らおいを縛るんだ」

引き出される時は尋常に引き出されて来た、ともかくも、黙つて縁の下へ寝たのは悪い、悪いところはあやまつた方がよからうと思うから、尋常に引張り出されて来たのであるが、言いわけも聞かないで縄にかけるといふのはいかにも了簡りょうけんがなり兼ねる、それはひどい、無理だ、と思つたから米友はムキになりました。

「なんで俺らに縄をかけるんだか、それを言ってもらいてえ」  
「貴様はこの下で何をしていた」

「ここで寝ていたんだ」

「嘘うそを言え、もう一人の仲間はどうした、白状しろ」

「仲間？ 仲間がどうしたんだ、俺らは一人きりなんだ、一人で旅をして来てここへ寝たんだ、仲間なんぞはありやしねえ」

「嘘を言うな、太い奴だ」

警衛の役人が米友の横面よこつらをピシヤリと一つ撲なぐりました。

「おや、撲つたな」

さあ米友が承知しない、両の腕に力を籠こめてうんと振りもぎると、押さえていた二三人がよろよろとよろけて手を放す。

「ナゼ俺おいらを打ぶつた！」

米友はそこいらにいるのを二三人まとめて抛ほうり投なげてしまつて、お堂の欄干の上へ飛び上りました。

「それ荒あばれ出した、怪我をするな」

六尺棒だとか、刺さす棒ぼう、突つく叉またなんという飾り道具を持ち出して、米友を押えようという騒さわぎになってしまいました。

「どうして俺らはこんな人に間違まちがえられるんだ、悪いことをしねえのに悪者にしてしまやがる、ほんとに口く惜やしいなあ」

ほんとに口惜しい、米友は無邪気で痛烈な齒嚙はがみをする、米友の身にとればほんとに口惜しいに違いないのです。

「仕方がねえから逃げちまえ」

逃げちまえといつても、下へは逃げられない、本堂は人がいっぱい。

「和尚様」

米友は素早すばやく人の中を潜くぐり抜け、人の頭を飛び越すようにして遊行上人の膝のところへ来てかじりつきました。

「和尚様、助けておくんない」

この一場の騒ぎで席が乱れても遊行上人は、もとの座に坐っていました、

「どうしたのだ、お前は」

「どうしたって和尚様、ほんとに口惜しくつてたまらねえや、

人を見ると悪者にばかりしてしまやがる。和尚様、お前は出家だから人助けをしてくれるだろう、俺らが悪者か悪者でないか、お前の眼で見たらわかりそうなものだ」

米友は遊行上人に囁かじりついてこう言っていました。

「わかるわかる、お前は悪者ではない」

「そうだろう、それ見ろ」

米友は遊行上人を唯一の味方に取った気でいる。

「まあまあ静まってくれ、この男は決して悪者ではないから勘弁かんべんしてやってくれ」

遊行上人が手を挙げてなだめると、それでまた騒ぎが静まっています。

「それ見ろ、この坊さんが知ってらあ、見る人が見りゃあ、ちやあんとわかるんだ、お前たちは盲目めくらだ、この坊さんはなかなか

えらい」

「お前はどこから来たのじゃ」

「伊勢の国から来て、江戸の下谷の長者町の道庵先生といふところまで行くんだが、たびたびこんな目に会ってぶん撲なぐられたりふん縛しばられたりしたんじゃあ、ほんとにやりきれねえ。それに和尚様、おらあ、この通り片足が悪いんですからね。この片足でお前様、東海道を江戸まで、ひよこひよこ歩いて行こうというんですからね。不具かたわもの者だから世間が不憫ふびんをかけてくれないんだらう、それをお前、あつちでも粗末にしたり、こつちでもぶん撲なぐつたり、俺らの身にもなってみねえな、ずいぶん辛いよ」

聞いている者は、無邪気な米友の憤慨を聞いて吹き出したうちにも、なんとなく眼に涙を持ってきて、なるほどこれは悪人

ではないという気になりました。

遊行上人も米友の言いぶりを聞いて微笑しました。

五

いつか天竜を渡つて秋葉山道あきばさんみちの淋しい辻堂の中。

「昨夜ゆうべくれえドジを踏んだことは無えね、めざして来た乗物を天

竜寺へ追い込んで、こいつは鴨ねぎが葱を背負つて来たようなもの

だと思つたら、なあーんのこと、向うの方が上手うわてで、天竜寺へ

参詣と見せて籠かじぬ抜けだ、それにあの坊さんに腹ん中まで見透か

されて、命からがら逃げ出して来たなんぞは、近来に無え図ずの

失敗しくじりだ」

が、んり、きが愚痴ぐちをこぼすと七兵衛が笑いながら、

「俺もおかしいと思つたよ、裏で、いま合図があるか、いま合図があるかと待っていたが、いつまでたつても音沙汰が無え、そのうちに泥棒！ という騒ぎになつたから、こいつ失敗しくじつたなと思つて逃げ出したが、自分ながらばかばかしい」

「兄貴の前へも面目が無え。それにしても、あの遊行上人という坊主は只者ただものじゃねえな」

「そりゃあそうさ。いつたい、遊行上人に食つてかかろうというお前の了簡方りようけんかたがわからねえ、ほかに仕事がねえじゃあるめえし」

「それにや兄貴、仔細わづかがあるんだ、あの坊さんに意趣も遺恨もあるわけじゃあねえが、頼まれたことが一つあるんだ、それは名前なは言わねえが、ほかの宗旨の奴から頼まれたというのは、これこれが、んりき、貴様も忍びと盗人ぬすつとにかけちやかなりの腕うでだそうだ

が、どうだ一番、遊行上人のものを盗んでみると、こういうのだ」

「なるほど」

「遊行上人であろうとも、弘法大師であろうとも、盗もうと思つたらきつと盗むと、まあこんなふうたなかに啖呵を切つてみたものよ」

「なるほど」

「ところがその頼んだ奴の言うことには、が、ん、り、き、そう易く言うが、この相手はちいーと違うぞ、なんしろそれ、仏眼ぶつがんとやら神通力じんずうりきとやらで、人の心をちやあんと見抜いてしまふ坊さんだから、いくらお前が忍びや盗人が上手でも、うっかり傍へも寄れめえとこう言うんだ」

「なるほど」

「そう言われるとこつちも癩しやくだあな、よし、向うが仏眼なら、

こつちもが、んりきだ、一番その遊行上人とやらを遣付けましよ  
うと、こう両肌もろはだを脱いじまった」

「なるほど」

「よし、お前がその意地なら腕に撚りをかけてやつてみる、幸  
い、あの遊行上人は、天竺てんじくから来たという黄金きんの曼陀羅まんだらの香盒こうごう  
というものを持っている、それをしじゅう懐中ふところへ入れているか  
らそれを盗んでみると、こう言うのだ」

「なるほど」

「ようがす、その香盒とやらの形はどんなものだと聞くと、直径さしわたし  
三寸ぐらいの丸い小ちっぽけなもので、黄金きんで出来ていて、曼陀羅  
とかお題目とか、むずかしいものが彫つてあるんだそうだ」

「なるほど」

「そこでまあ意地と二人で、よしと請合うけあつて来てみるとあの始

末だ。なあに、これは仕掛しかけがあつて、誰か上人の方へ筒抜けをする機関からくりだところう思つたから、小手調べに二つ三つ手近なやつを引ん抜いてみたら驚くじゃねえか、ちやあんとあの上人が見抜いてしまやがつた。あの人混みの中で、どうしてまあこつちの業わざがわかるんだか、實際あの坊主の眼力がんりきには、このが、ん、り、き、も降参したよ」

「なるほど」

「けれどもこのままじゃ引込めねえ、あの上人も、こちとらを出し抜いた乗物も、みんなあと先になつて東へ下るんだ、仕事はまだこれからよ。兄貴、お前もここで外はずすのは惜しかろう、ぬすつとみようり盗人冥利だ、行くところまで行きねえな」

「いいとも」

この日、遊行上人もまた天竜寺を出でて東へ下りました。

一行六人、それに米友を加えて七人の旅でありました。

この一行のために船賃も橋賃も御免でありました。わざわざ出て来て拜む者もありました。宿へ着くと羽織袴の人が迎えに来て、紫の幕が張つてある本陣へ案内するのでありました。

それがために米友の旅は非常に楽なものでした。一文も自腹じばらを切らずに、到るところ大切だいじにされて通ります。

駿河するがの府中まで来ると遊行上人の一行は、世の常の托鉢僧たくはつそうのような具合にして、伝馬町の万屋よろずやというのへ草鞋わらじを脱いでしまいます。

今宵こよいは紫の幕もなければ領主からの待遇も避けて、ただあたりまえの旅客として泊り合っただけです。

風呂にも入り、夕飯も済んで、挟箱はさみばこ担かぎはどこへか用足しに

行つてしまい、米友はまだ寝るには早いから坐つていと、長押ながしに槍がかけてあります。

「槍、へへん、槍がありやがる」

米友は槍を見てニコニコ笑い。

「久しぶりだから、ひとつ使つてみてやろうかな」

部屋の隅にあつた碁盤と将棋盤を持つて来て、それでやつと取り下ろしたのが九尺柄の素槍すやり。

ちょうどこの日に、机竜之助もまたこの宿に泊つていたのであります。

竜之助がひとり酒を飲んでるところへ、お絹が風呂から上つて来ました。

「またいやな奴がついて来ましたよ」

「誰が？」

「浜松の大米屋でお前さんを覗ねらつたという奴」

「うむ、あれか」

「あれがまたこの宿へ入り込みましたよ、執念しゅうねんぶか深いやつらつた  
ら」

「放ほうつておけ、今夜来たらば……」

竜之助がグツと一口飲む、燈ともしびの光で青白い面かおが熱ほてる、今夜来たらば……叩き切つてしまふというものと見えます。

「まあ、およしなさい、道中は無事に限りますから、またひとつ裏かを搔かいて、出し抜いてやりましょう」

お絹は竜之助の面を見て笑う。こうして見れば、二人は夫婦気取りで旅をしているようです。

お絹が竜之助をたよるのか、竜之助がお絹をたよるのか。お

絹は浜松へ引込んでしまおうかと思つたのを、ふと、竜之助が来たので、また一緒に江戸へ出ることになつたらしい。竜之助もまたお絹によつて、難儀なるべき道中をとにかくも心安く江戸へ下ることができるといふものらしい。

机竜之助のいたところと、遊行上人の泊つていた一間とは襖ふすま一重の隔たりでありました。

眠れないでいた竜之助には、その夜更けて、不夜ふやの念仏をしていた上人の許もとへ忍び寄つた二人の盜賊ぬすつとと、それに驚かなかつた上人の問答をよく聞くことができました。

初めはこう思つていました——これは自分のところへ来るつもりもりの盗賊が、間違つて隣りへ来て僧侶を驚かしたものらしいと。

ところが問答を聞いてみると、盗賊は別にこの僧侶に望みをかけて来たものらしいのであります。

事起らばと、竜之助は枕許の刀を取って待っていたが、何事も起らずに、盗賊共は帰ってしまったて、僧侶があとで人を呼んで騒ぎでもするかと思えば、そんな様子は更にありませんでした。

こんなふうにして、駿河の府中から出た竜之助とお絹の駕籠、それをまた後になり先になつて跟つけて行くが、んりきと七兵衛。

本道を行かずに久能山くのうざんへ廻つて、一の鳥居に近いところで駕籠を卸すのを見定めた七兵衛が、が、んりき、へ耳打ちをしました。

久能山の鳥居の前で、

「もしもし、そこへおいでになる奥様」

が、ん、り、き、が、呼、び、か、け、た、の、で、振、向、い、た、お、絹、

「どなた」

「へえ、お初にお目にかかります、私でございます、あなた様のよく御存じの七兵衛の友達でございます」

が、ん、り、き、が、小、腰、を、か、が、め、て、笠、の、紐、を、解、く、

「七兵衛のお友達？　そうしてわたしに何か御用が……」

「へえ、別に用もございませんが、少しばかりお話し申し上げたいことがあります」

「何のお話ですか」

「ここじゃお話しにくいんで……」

「なにもそんなに話し悪いにくことはありません、ここでお聞き申しましょう、歩きながらお聞き申しましょう」

「左様でございますか、そんならそれでよろしゅうございます。」

いつたい、あなた様はあの七兵衛という男が、今どこへ何しに行つたと思召おぼしめしなさいますか」

「七兵衛がどうしました」

「お前様はすっかりあの七兵衛に出し抜かれておしまいなすつた、ここでお話しにくいと申し上げたのは、それなんです。私共は、いちいち七兵衛の魂胆こんたんを喋しゃべってしまいたいと思ひますが、こんなところでひよつとして人の耳に入つても大事はございませんか」

「ようござんすとも、誰に聞かれたつてちつとも苦しいことはありません、言つてごらん」

「なに、大したことじゃございません、あなた様とお連れのお乗物、あの中のは、たしか、なんと言つたけな、机竜之助か、そんな名前前の剣術の出来る先生でしょう」

「それがどうしたというの」

「どうもしませんけれど、お気の毒なことにはあの先生も今頃は、首になつていらつしやることでしよう。それを知らずに、こんなところをブラブラしておいでなさるあなた様の気が知れませんね」

「何ですと、あの人首になる？ そりやまた、どうしたわけでしょう」

「どうしたわけだか、そりやお前様の方が胸に覚えがおりなさるでしょうから、申し上げるまでもありませんが、まあ勿体（もったい）なつけずに底を割つてお話し申し上げれば、こういうわけなんでございます。七兵衛と私とが、お前様とあの盲目（めくら）の先生とをつけ覘（ねら）つたのは昨日や今日の話じゃあございません、浜松の大米屋以来のことです。私の方は初手（しよて）からの他人だが、七兵衛の方

はお前様にお近づきがある、その上もう一人の盲目の剣術の先生、あれが大変なもので、七兵衛はあの先生を尋ねるためにこの東海道は幾度歩いたか知れねえと言うんで。そういうわけでございますから、道中こっちの方にはちゃんと仕組みが出来ていたんで。巧うまく企たくらんで、あの先生をこっちのものにしてしまう、細工は隆々りゆうりゅう、今日という今日は、きれいに生捕いけどつてしまって、さいぜん駕籠にお乗りなすつたままそっくりお連れ申して、そこで今頃は三保の松原へ連れて行かれて、首になっているだろうと、こういうわけなんで」

「わたしにも似合わない、すっかり老爺おやじに引っかけられてしまった」

お絹は駈け出して、前まへの茶店の方へ行こうとすると、  
「まあ、待ちなさいまし」

が、ん、り、き、はその袖を控えて、

「まだ、お話し申し上げることがあるんでございます、それだけでは、まだほんの序じよの口くちで、盲目の剣術の先生や七兵衛が今どこにいるか、それもおわかりになりますまい」

「三保の松原だと言ったじゃないか」

「三保の松原には違いありませんが、三保の松原も広うござい  
ますから。なあに、まだ大丈夫でございます、首になるような  
気遣きづかいはございません、とにかく一通りお聴きなすつて」

「早く話してごらん」

「ここまでは私も七兵衛の方へついて片棒かたぼうを担かついでやりました  
が、これから一番、裏切りをして、お前様の方へ忠義を尽して  
みてえんで」

が、ん、り、き、は、お絹を人通りの少ない木立の方へ引張り込むよ

うに並んで歩いて、

「ナニ、七兵衛の友達といったからって通り一遍の仲なんですから、どっちへ転んだって、大した義理が欠けるわけじゃございません、あの野郎にこれだけ尽しておけば、これからまた持役もちやくを替えて踊ってみてえんで……その机竜之助という剣術の先生、それは敵持ちかたぎものお方でござんしたね、敵と覗ねらう相手がちようど船で清水の港へ来ていゝるんで。そうして七兵衛と打合せがしてあつて、江尻えじりの宿の外はずれで名乗りかけることにしておいたのを、お前様方が久能山道へお廻りなすつたものですから、趣が變つて三保の松原という段取りになつたので……それで鶴屋へ送り込むようにおつしやつたあの乗物を、途中から七兵衛が行つて折戸おりどの方へ曲げて、三保の松原へ連れ込んだところなので。そこには敵かたぎの相手の、なんと言いましたか、まだ若い人だそうで、

その人が待つている、その上に荒っぽい船のやつらが網を張つて逃げられねえようにしている、そこるところへ、あのお乗物がすっぽりと陥り込んだというわけですから、いい気なのは待ちほけを食わされたお前様だ、その魂胆を一通り御注進に参つたので。いやどうも、頼まれもせぬに、飛んだ御苦労な役目でございます」

## 六

伊勢の国大湊おおみなとから出た若山丸は無事に伊勢の海を出て、東海の航路はしを駛つて行つたのでありましたが、乗手の中にただ一人、無事でなかつたのはお玉でありました。お玉はこの舟に乗つてから、芸名のお玉を改めて本名のお君に返りました。慣れぬ船

の中で、船暈ふなよひに悩まされ通しであつたのがこのお君でありました。

伊勢を出る時から頭が上らなかつたのが、遠州灘えんしゅうなだへ来ると、もう死人のようになってしまいました。このまま船を進めれば、お君は船の中で死んでしまうよりほかはないと思い、

「お松様、どうも苦しゅうございます、わたしはモウこの辺で船から卸おろしてもらいとうございます、とても船でわたしの身体は江戸まで持ちそうもありません、こんな身体をしてお世話をかけては皆様にも申しわけがありません、どこでもようございませうから卸して下さいませ」

苦しきのあまりにお君はこう言つて訴えました。船で悩む人には土よりほかに薬はない、お君の苦痛を救うには願ひ通りに船から卸して、土を踏ませるに越したことはないのです。そこ

でちょうど、船頭のなかに知合いのものがあつて、遠州の三浜みはまというところへ船をつけて、そこで一行からお君だけを卸してしまつたのであります。船から卸して、その漁師の家で暫らく保養をさせておいて、ほかの連中は先を急ぐのですから、後日を約して、ここでひとまず袂わかを別つことになりました。

「お君さん、それではお大切だいじになさいまし、私共はひとまず駿河の清水港というところへ船やどりをすることになっていきますから、そこからお迎えをよこします故、どうか安心して待つていて下さい」

お松はこう言つて慰めました。それを頼りにしてお松とお君とは、泣きの涙でしほしの別れを惜しんだのであります。

僅かの間でしたけれども、二人は姉妹のような仲になつていたのでした。

海で悩んだ病氣は陸おかへ上ると、横着者おうちやくものみたように癒なおつてしまいました。二日も床に親しんだお君は、もうほとんど常からだの身体と言つてもよいくらいになつてしまいました。

厄介になつている漁師夫婦、べつだん悪者ではないが、亭主は酒が好きで、よく夫婦喧嘩をする。身体が癒つてみると、いつまでもこんなところに厄介になつていることは心苦しい上に、漁師夫婦は、若山丸の船頭からお君のためといつて相当の手当を貰つているくせに、それは遣つかい果して今度は、お君の持つてゐるいくらかの用意に眼をつけ出し、それにまた酒の上で、この亭主が年とし甲斐がもなくお君の仇あだな姿を見て、へんなことを言い出し、それを山の神が疑ぐり出して、喧嘩が始まる、子供が泣き出す、近所隣りが仲裁に来るといふ騒ぎですから、お君はと

うとう五日目に、居堪いたたまらなくなつてここを逃げ出しました。

お君の心では、お松に言われた通り駿河の国清水しみずの港まで尋ねて行く覚悟でありました。

家の者が寝静まつた頃を見計らつて、宵よいのうちから用意しておいた手荷物とりまを取纏まとめ、草履ぞうり穿はきでこの漁師の家の裏口から首尾よく忍び出てしましました。

家を駈はけ出すと浜辺はすの広い原、宵みようじようの明星みよが高く天神山あまのじんというのから東へ外はれて光ひつている。まばらに見える漁師の家の屋根、どこでもまだ竈かまどの烟けむりを上げているところもありません。暁あけとは言いながら、星をたよる闇夜やみよと同じことやみよで、お君はそこを一生懸命いっせいかんめいで、順路はここから北へ国安川くわんやすがわというのに沿うて行き、掛川かけがわの宿へ出て、東海道本道に合するといふことを聞いていましたから、その心持で北を指して出かけました。

無分別むぶんべつで出て来たお君。生れ土地から尾上山おべやまの外へ出たことのないお君。東の空に光る宵の明星をめあてに、只管ひたすらに二里ばかり歩きつづけましたが、そこで一筋の広い道が東から来て筋違すじかいになるところの庚申塔こうしんとうの前に立って、行先に迷うていました。めざして行く掛川はどの辺で、出て来た三浜の漁村はどこであったか、それさえ見当がつきません。

掛川へ出て、清水港へ行くつもり。旅芸人の中に入つてなりとも、その目的を果すにさして困難はあるまいと思つていたが、どうして、僅かに浜からここまで来てさえこの足、もう右へ行つてよいのか左へ行つてよいのかわからなくなつてしまったものを、二十里三十里の清水港までどうしてこれで旅がし通せよう。お君は自分の足が覚束おぼつかなくなるとつれて心細さが増してきました。

ちようどその時分、東がようやく白しろんで、いずこの里かで鶏の鳴くのが聞えました。空の明るくなることは、人の心をも明るい方へ持つて行く、鶏の鳴く音は、人里懐しい響を伝えるので、お君も気が引立ちました。そうしていま眼の前へ出た広い道を取つて一里ほど行つて、とある百姓家の裏で水を汲んでいた百姓のおかみさんに、

「もしもし、あの、掛川へ行くには、この道を行つてよろしゅうございましょうか」

お君がたずねると、水汲み女房は訝いぶかしそうな眼をして、  
「掛川へおいでなさる？ そりや違いますよ、掛川へ行くには、これから一里ほど戻つて街道がありますから、それを真直ぐに行くのですよ」

こう教えられてお君はガツカリしました。それでは最初きた

道を真直ぐに行けばよいのであったものを。といつて、これからまた一里の道を引返す勇氣は更にありません。

「そうでございますか、どうも有難うございませう、そうして、この道を行けばどこへ出るのでもございませう」

「この道を行けばお前さん、中泉なかいずみの宿の方へ出てしまいますよ、掛川は東、中泉は西ですから、まるつきり方角が違いますね」

「そうですか、それでは」

こうなるとお君の頭が混乱してしまつて、無暗むやみに向いた方の道へさつきと歩き出しました。

東へ行くつもりで西へ来た、ここでお君は考えてしまいました。東の方はまだ知らない空、西の方が故郷に近い。東から遠ざけられて西へ行く自分は、やっぱりそちらの方に縁があるのではあるまいか。いつそそれでは東へ行くことをやめて、西へ

帰つてしまおうかしら。

一時のはかない心休めに、いつそ故郷へ帰つてしまおうかと思つてみたが、「自分の身はお尋ねになつてゐる身であつた」ということを考え出して、

「そうそう、わたしは盗人という濡衣ぬれぎぬがまだ乾いていない身であつた、古市ふるいちへ姿を見せれば、直ぐに縄目にかかる身であつた、さあ故郷へは帰れない」

今になつて、そのことが急に思い出されてきました。

「米友さんはどうしたろう、ムクはどうしたろう、わたしは、やっぱり帰れやしない」

お君は、そこでまた呆然ぼうぜんとして立ち尽してしまいました。

さまざまに思い乱れつつも、お君は西を指して歩きました。

日がだんだんに昇る。日は昇つても人の通りは尠すくない秋の野路、

それを半日も歩いていっていると、うえ 饑とつか 疲れで足が動かない。何とい  
うところか、はず 田舎の外れ、まご 馬子などの休みそうな一ぜん飯屋の  
隅でから 辛くも、あさげ 朝餉と昼飯とを一度に済ませて、それから中泉と  
聞いて歩いて行きましたが、少したつて中泉はと尋ねてみたら、  
また横道へ入つたと言われて、もう気を落してしまつて、それ  
からは足が動かず、ちようど見つけたのがはちまん 八幡の森。その森蔭  
で休もうとすると、小さいながら人一人を容いれて余りあるほこら 祠。  
お君はその中へ入つて、風呂敷包を抛ほうり出してほつと息をつい  
たのであります。

「お母さん、お母さん」

お君は悲しさと懐しきで、母を慕うて声をあげた時に、かりね 仮寝  
の夢が破れました。夢が破れて見ると、いつのまにか日は暮れ

かかつて、祠の外から、西の海へ沈む夕焼けが赤々として本堂を洩れて、格子こうしの透間すきまからお君おもての面にまで射し込んで、夢よりはいつそう切せつないわが身に返りました。

旅寝の疲れで夢を見て、母を恋い慕うて覚めて見れば、身はひとり寝の祠の中で、外は日暮れの物淋しい夕焼けの色です。

眼が覚めてもお君は、もうここを立ち去る気にはなりませんこつりようでした。荒涼たる心の中、さすらい尽した魂に射し込む夕焼けの色は、西の空に故郷ふるさとありと思う身にとつて、死んでその安樂の故郷に帰れと教えぬばかりの色でありました。

鳥は古巢へ帰れども

行きて帰らぬ死出の旅

今まで無心で歌っていた歌。

「ああ、死んでしまおう」

お君はここに初めて死の決心を起しました。

死の決心がひとたび定まったために、生の重荷がことごとく  
振り落されてしまいました。

お君は祠の隅を見廻して破れた太鼓に眼をつけて、それを梁  
の下まで転ころがして来ました。

その太鼓を、梁にかけた下締したじめの下へ置いて、そうして身繕みづくろい  
をして、その紐ひもへ両手をかけた時には、なにかしら涙が溢あふれて  
来ました。

その時ちようど、祠の裏で颯さつと藪やぶをくぐるような物の音。

「あ、誰か来て見つけ出されては恥の上の恥」

お君は結んだ紐を梁へかけ直して、太鼓の上へ身を載せると、  
前の扉がガタガタと激しく動いて、地鳴りをするほどに、

「ワン！」

と一声。生命いのちを忘れたお君の身にも、どうして、この声は聞き忘れられない声でありました。

「ムクではないか」

祠の扉を押し開いて飛んで出たお君。

「ムクだ、ムクだ、ムクに違いない」

何もかも忘れて犬にかじりついてしまいました。

ここに来たのはムクであります。机竜之助と共に、七里の渡しを渡って熱田から浜松のつつきまでついて来たムク犬であります。浜松でムクを失った机竜之助は、そこでお絹という女を得て、同時にまた両眼めいの明を失いました。

すでに命を失おうとしたお君は、ここでムクと命とを取り返してしまいました。

「ムクや、お前どうしてここへ来たのだい、どこに今まで何を

していたのだい、よくわたしがここにいることがわかりましたねえ」

お君はムクの首を抱いてしまつて、犬の顔と自分の面かおとをピツタリくつつけて嬉泣うれしなき、ムクは何も言わず、咽喉のどを鳴らし尾を振つてお君のする通りになつています。

「わたしは、お前が古市でお役人につかまつて、あの時にもう殺されてしまったものとばかり思つていたのよ、よく逃げられたねえ。それでお前、わたしがこつちへ来たということがわかつて、そうしてわたしの後を追つて来たのだね、ほんとにお前は神様のような犬だよ。そうしてお前、あの米友ゆくえさんはどうしたい、あの人の行方ゆくえを知つてるでしょう、話してお聞かせ、いえ、連れてつておくれ」

ムクが犬でなかつたら、この場合に語りつくせぬ物語がある

のでしようけれども、いかに聡明であつても人でない悲しきには、あれから後の話を一言も語つて聞かせることができませぬ。

「お前が来てくれれば、もうわたしは死ななくてもよい、もう一足お前が遅かろうものなら、わたしは死んでしまつていたのだよ、きつとわたしのお母さんが、まだわたしを死なしたくないと思つて、そうしてお前を助けによこしたんだね。お前は陸を来る、わたしは海を来て、この辺で下りようとは思わなかつたのに、それをお前が尋ね当てて来るなんて、ほんとうに切つても切れない因縁いんねんがあればこそでしょう、やつぱりお母さんのことを考えていたから、その引合せに違いない」

お君はやつとムクの頸くびから手を離して、そうして沈み行く夕陽の海の彼方を見て掌を合せて拝みました。

お君は暫らく西の空を拝んでいましたが、またムクの頸を抱

いて、一人で二人分の話をしていました。

暫らくして、夕焼けも消えてしまい、夜の色が、波の音と一緒に深く押寄せて来るのに気がついたお君は、

「ああ、あんまり嬉しいので、日が暮れたのも忘れてしまった、これから出かけるといったって仕方がないから、今夜はここのお社へ泊<sup>やしう</sup>めてもらいましょう。ムクや、よく神様にお礼を申し上げて、今夜はここへわたしと一緒に泊めてもらうんだよ」

命を捨てるはずであった神前で、この不思議なる主従は、相抱いて一夜を明かすことになりました。

それからほどへのち程経て、東海道の駅々を、どこで手に入れたか一挺ちようとうの三味線を抱えて、東へ下るお君の姿を見ることになりました。そのあとには例のムク犬がきりようついていています。

いつでも問題になるのはお君の容色。雲助、馬方、道中師どうちゆうしの連中、これらが遠くから見て悪口を言う分には差支えないけれども、もしいささかでも悪意を持って近寄ろうものならば、眠っていたようなムク犬の眼が鏡のように光ります。垂れていた全身の毛が逆さに立ちます。そうして猛然として唸うなりつけます。それですから、さすが荒つぽい者共がお君の傍へ近寄れませんでした。

朝顔日記もどきの風流な客人が、お君を招よんで歌をうたわせる、お君は以前備前屋でしたように、席へは上らないで、庭でうたいます。

「どうかこの犬も一緒にに入れて下さいまし」

お君が歌をうたう傍へ、ムク犬が来て跪かじこまる。こんなわけで、誰人もついにお君に指一本加えることができない上に、相当の収入みいりがあつて、お君は旅に不自由することなくして東へ下つて行くことができました。

日数ひかずいくつか重ねて駿府すんぶの町へ入りました。お君は駿府の二丁目を流して歩くと案外にも多くの収入みいりがありましたから、これから二三日は稼かせがなくてもよいと思ひました。

「清水港というのへは、これから何里ございませう」

駿府の町を出る時に、お君は人にたずねてみました。

「清水へ行かつしやるなら、本道を行かずに久能山道くのうざんみちというのへおいでなさい、左様、久能山の下まで二里、それから清水港まで一里半もあるかね、通して三里にはきついと思へば間違ひ

はありませんよ」

お君は、それを聞いて喜びました。もうたつた三里行きさえすれば清水港、そこに姉妹きょうだいのようになしていたお松さんが待つている。

ようやく清水港の近くへ来た時に、お君はその景色のめざましいことに驚かされてしまいました。

右の方へは三保の松原が海の中へ伸びている、左の方は薩埵峠さつたとうげから甲州の方へ山が続いている。前は清水港、橋柱ほばしらの先から興津おきつ、蒲原かんばら、田子たごの浦々うらうら。その正面には富士山が雪の衣をかぶつて立っています。

「まあ、なんとという眺めのよいところでしょう」  
お君は立って風景に見とれていました。

秋の日が右に落ちて、今で言えば四時頃の時でした。船をたずねて波止場はとばへ行く道を人に尋ねると、人はよく教えてくれましたから、お君は、その通りに行こうとする時分に、後ろから喧ましい蹄ひづめの音。振返つて見ると、砂烟すなけむりを立てて一頭の駄馬が人を乗せて驀然まつしぐらに走つて来ます。お君は驚いてその馬を道傍みちばたに避けると、馬は人を乗せた上に、また一人の旅人がその轡面くつわづらを取つて駆けて来るのです。轡面を取つている男は、逸はやる馬を引き止めるつもりではなく、それと一緒に走るつもりのように見えました。それはなんとなく穏かでない光景ですからお君は、ムクと一緒に道傍に立つて馬の過ぐるのを避けました。それを避けながら、なんの気なしに馬の上を見るとその乗った人。

「あれ、あのお方は」

お君は眼の前を過ぎて行く馬を見送つて、その乗っている人

の後ろ姿を伸び上つて見ました。黒い着物に黒い頭巾ずきんを被つていて、面かおの全部を認めるわけにはゆきませんでした。それで、も通り過ぐる途端とたんの印象で思い起したのは、伊勢の大湊の船大工与兵衛の宅で会つた盲目めくらの武士、幽霊のような冷たい人。

お君はこう思つて馬上の人を見送つておりましたが、あの晩のことを考えると、今でもぞつと水をかけられるようで。今も眼の前を通つたのが、どうもこの世の人ではなくて、やっぱり幽霊が飛んで行つたように思われてなりません。

この時にムク犬は何を見たかキリリと尾を捲まき上げて、三保の松原の方を向いて前足を揃えました。

「どうしたの、ムク」

その時、また同じく三保の松原の方から風を切つて飛んで来る旅人。その旅人を見ると、ムクが一声吠えて飛びかかります。

「これ、どうしたんだね、人様に飛びかかつて」

お君は身を以てムクの前に立ち塞がる。その隙を見て旅人は、燕のように急速力で駆け抜けてしまう。これはすなわち七兵衛。ムクの力として、お君の抑えた手おさを振り切るのは雑作ぞうさはあるまいが、それでも抑えられた手が主人の手と思つてか、身振りみぶるをしつつ七兵衛の駆けて行つたあとを睨んで立っていました。

「なんでお前は、そんなに見ず知らずの人を吠えるのです、今までそんなことはなかつたじゃありませんか」

ムクを促してうなが立とうとすると、

「三保の松原で大喧嘩おおげんかがある、早く行つて見ろ」

街道で物騒ものさわがしい声。

喧嘩喧嘩、という人波と一緒に、お君はムクに引かれて三保の松原へと来てしまいました。

「ムクや、危ないから、あまり近くへ行つてはいけないよ」  
そう言いながらも、お君は逸はやるムク犬に連れられて人混みの  
中へ行く。

八

ムクが逸るから、それに逐おわれてお君も人混みの中へ潜もぐり込  
んでしまいますと、

「おや」

お君の驚いたのも道理、この人混みの中で槍を構えている人  
こそ、わが無二の友、宇治山田の米友でありました。もしやと  
思ったけれども、米友の面かおと姿ばかりは見違えようと思つても  
見違えるわけにゆきません。

「友さんではないか、友さん」

お君は人を掻き分けて飛び出しました。ムク犬はそれより先に勢いよく米友の傍へ飛んで行きます。その人が米友であったればこそ、お君は白刃の中を頓着する余裕がありませんでした。武士でさえ立入り兼ねる白刃の中へ。

「米友さん、危ない！」

米友は今、一人の若い武士を相手にして一心不乱に槍を構えているところでありました。その横合いから、お君は米友の身体に飛びついてしまいました。

「や、危ねえ」

お君に飛びつかれた米友の驚いたおかしな顔。

「米友さん、何をするのだよ。危ないじゃないか、お侍と斬合いなんぞして、怪我けがでもしたらどうするんだい、早く謝罪あやまつて

おしまい」

「君ちゃん、どいていな、この侍は若いくせに悪い奴なんだから」

「いけない、お侍様に手向いなぞをしてはいけません」

お君は躍起やつきになつて米友の槍先を遮りながら、その相手になつてゐる若い侍の面を見てまた驚き、

「まあ、これは宇津木兵馬様……どうしたことか存じませぬが、どうぞ御勘弁下さいまし、この人は気が早くて口が悪い人ですけれども、決して悪い人ではありません、わたしの友達でございますから、どうぞ堪忍かんにんしてあげて下さいまし」

宇津木兵馬は船の中でお君がよく知合いの人でありました。お君は米友に代つて謝罪あやまつてしまいました。

宇津木兵馬は、ここでお君に返答を与える隙もなく、抜いた

太刀は鞘さやへ納める余裕もなく、その場を飛んで出でました。

兵馬が走はせ出すと、群集は兵馬のために道を開いて通すしました。

あとに残ったのが米友とお君。

「米友さん、お前、どうしてまあ、こんなところに来ていたの」  
「それよりか君ちゃん、お前がまたどうしてこんなところへ来たんだい」

「それにはずいぶん永い話があるんだから、どこかでゆつくり話しましよようよ」

「ここで話そう、この松の木の下がいいや」

はごろもまつ

羽衣松の下。米友は槍を提さげたなり歩いて行って坐る。お君は置放しにした三味線を取って来て坐る。ムクはその前に両足を揃しやがえて蹲まむ。

「友さん、あれからどうしたの」

「どうしたのって、お前」

米友は何から話してよいかわからないように、目をクルクルさせて、

「ずいぶん俺おいらもひどい目にあつたよ」

「わたしもずいぶん心配しちまつた」

「それ、あの晩、お前を大湊の船大工の与兵衛さんのところへ送り届けてよ、それから俺らは一人でムクの様子を見に山田の方へ行つたらう、そうすると、町の入口で直ぐにお役人の網にひつかかちまつたんだ、それからお役人が八方から出て来て俺らを追蒐おっかけやがつたんだよ、よそへ逃げりやよかつたんだが、それ、君ちゃん、お前の方が心配になるだろう、それだもんだから俺らは大湊へ逃げたんだね、そうすると山田奉行の方から

も人が出て両方から取捲いてしまったんだよ、けれども俺らはそこんところをひよいひよいと飛び抜けて、与兵衛さんの家の裏口へ行つて船倉ふなぐらの方へ廻つて、それから歌をうたつてみたんだよ、もし君ちゃんにその声が聞えるかと思つてね」

「ああ、よく聞えたよ、十七姫御ひめごが旅に立つというお前のおハコの歌だろう、海の方からよく聞えたけれども、わたしはどうしてもあのととき出て行けなかつたのだよ」

「出て来ない方がよかつたよ、出て来れば捉つかまっちゃうんだからね。そうするとね、もうその時はお役人に追い詰められていたんだから、仕方がないから俺おいらは海へ飛び込んじゃつた、海へ飛びこんでね、時々頭をばかりばかりと出して様子を見ながら泳いでいたんだよ。そうするとね、伝馬船に乗せられてお前がやつて来るじゃないか。こりやよかつた、与兵衛さんがお前

を舟で逃がしてくれたのだと思つたから、俺らはうれしまぎれにその舟へ飛び上つて、君ちゃんと言つて抱きついたら、それが大違い」

「ああ、それでわかつた、その人はわたしじゃなかつたけれど、わたしがいま姉妹のようになっているお松さんという人なのよ」  
「そうか、なんしろ暗いところで、年頃の似た娘が一人乗つていたんだから、嬉しまぎれにお前だとばかり思つちやつた」

「それをね、お松さんと船頭さんがね、大船へ帰つて来て一つ話にしているのですよ、舟で河童かっぱに出会であつたつて」

「河童じゃねえ、俺おいらなんだよ」

「でも舟では今でも河童にしてしまつてゐるよ」

「ナニ、河童じゃねえ、俺おいらだ」

「それでわかつた」

「人違いだったから俺らも吃驚する、乗手の方でも腹を立って、  
櫂かいでぶん撲なぐろうとするから、俺らはまた海へ飛び込んで、時々  
頭をぽかりぽかりと出して、もしもどこかの舟にお前がいるか  
と思つて、様子を見ながら岸の方へ泳いで行つたんだよ」

夕陽ゆうひはようやく沈みかかるのに、二人は話に夢中になつてしまつて、今のさき、槍を振りひらめかしたことも米友は忘れてしまつて、例の眼をクルクルさせながら、怪しげな手つきの仕方話しかたばなし。  
「岸へ泳ぎ着いたところを、その近所の舟小屋に隠れていたお役人が御用と来たもんだ、俺らも二三人投げ飛ばしてやったけれど、竿を持たねえと思うように働きができねえで、それどうとう捕まつて縄をかけられてしまったんだ、口惜しいと思つたよ」

「さぞ口惜しかったらうね」

「それでお役所へ連れて行かれて、さあ白状しろ白状しろって、ギユウギユウ苛められ通しなんだ。だってお前、白状しろたつて、盗みもしねえものは白状もできめえじゃねえか」

「ずいぶんひどいねえ」

「口惜しいから口を利いてやらなかった、そうするとね、証拠があるから是非に及ばねえと、役人の方で勝手にきめてしまつたんだよ。証拠というのは、お前のところにあつたあの印籠いんろうと、それから二十両のお金さ」

「あの印籠とお金が、どうしてまあそんなに祟たたるんだろう」

「俺おいらが口惜しいから口を利かねえでいるとお役人が、その二品を俺らの前へ突きつけて、さあこれを見たら文句はあるめえと言つて、俺らを死罪に行うときめてしまつたんだ。死罪というのは、お前、俺らを殺してしまふことなんだよ」

「まあ、お前が打首うちくびになることにきまつたのかい」

「ところがね、大神宮様の御領内はね、それ守護不入しゆごふにゆうといつて、世間並みの土地とは違うんだ。死罪にしてもね、首を斬つたり磔刑はりつけにしたりして、血を見せることはできねえ規則なんだ、不浄を見せては神様へ恐れ多いというんで、死罪の仕方が變つてるんだよ。それで俺らは、隠かくれヶ岡おかの上から地獄谷へ突き落されることにきまつたんだ」

「隠ヶ岡から？ あそこからお前、地獄谷へ突き落されてはたまるまい」

「昔はみんなそうして死罪に行なつたものなんだよ、それが久しく絶えていたのを、俺らがそれでやられることになつたんだ」

「危ないことだねえ、それをどうしてお前、助かつたの」

「助からなかつたんだ、俺らも突き落されて一ぺんは死んじまつ

たのだよ」

「突き落されたの？」

「ああ、身体中へ縄をかけられてね、それで突き落されて死んじまったんだ、一旦は死んじまったんだけど、与兵衛さんがその晩、そーつと死骸しがいを拾いに来てくれたんだよ」

「与兵衛さんが？」

「与兵衛さんは、せめて死骸でも拾って、仮葬かりとむらいでもしてやろうという御親切なんだね。それで俺らの死骸を担かついで来ると、その途中にお医者様が寝ていたんだよ」

「お医者様が寝ているというのはおかしいじゃないか」

「よつぽどおかしいよ、酔っ払って堤どての上に寝ていたんだがね、そのお医者様を与兵衛さんと俺らと二人で踏みつけてしまったんだよ、暗いもんだからね」

「乱暴なことをしてしまつたね」

「ところが、それでもつてお医者様が眼をさまして、二人を見てね、病人ならここへ出せ、十八文で診みてやるなんて、おかしなことを言つたんだそうだよ。なんしろ仮りにもお医者さんだから、与兵衛さんがそこで俺らを診てもらつたんだね、ところがそのお医者さんが、大変な名人でね、死んだ俺らを生かしちやつたんだよ」

「まあ、よかつたねえ」

「そしてお前、与兵衛さんのところまで毎日のように療治に来てくれたんだ、それで俺らはこの通り丈夫になつてしまつた」

「ずいぶん感心なお医者さんだね」

「そりやお前、感心にもなんにも」

米友はまた眼をクリクリさせながら、

「それからお前、与兵衛さんに聞いてみるとね、お前は大丈夫、親船へ頼んだからというわけなんだろう、それでまあ、ひとま<sup>ず</sup>お前の方は安心して、俺らも身体が丈夫になつてみると、それでは一番お江戸へ出てやろう、今いうお世話になつたお医者様が江戸にいるのだから、それを頼つてお江戸へ行くことにきめて、こうして出て来たんだよ」

「まあ、それでも、よかつたねえ、わたしもあれから舟で東の方へ出たのですけれど、途中で舟に酔わされてしまつて……」

お君は、それから後の物語をする。米友は眼を円くしたり面<sup>かお</sup>をしかめたり、拳<sup>こぶし</sup>を握つたりしてそれを聞いていたが、「やつぱり俺<sup>おい</sup>らたちが悪いことをしねえから、天道<sup>てんとうさま</sup>様が見通しておいでなさるんだ」

米友は胸を叩いて喜んだが、

「ちようど、お前が首をくくりかけた時にムクが行つて助けたように、俺らも浜松のこつちの方で危ないところを坊さんに助けられて、それから一緒に歩いてるんだ」

「その坊さんというのは？」

「その坊さんというのは、あんまり金持の坊さんじゃあねえのだけれど、不思議なことにその坊さんと一緒に歩いてみると、銭を出さなくつても人が大切だいじにしてくれる」

「今その坊さんはどこにいるの」

「今この先の信心者しんじんものの家にいるんだがね」

「そうしてお前、その坊さんの槍持をして歩いて来たのかえ」  
「ううん、そうじゃねえ、この槍は俺おいらの槍なんだ」

「お前、槍を持って歩いてるのかい」

「そういうわけじゃねえ、府中の宿屋でこの槍を捻ひねくつている

とね、亭主が来て見て、お前さん槍が使えるのかいと言うから、たんとも使えねえが、ちつとばかりは使えると言うとね、それじゃあ使つて見せてくれというから、よし来たと言つて、ちようど部屋へ飛んで来た蝶々を一羽、突いて見せてやった」

「蝶々を突いたのかい」

「その亭主がね、俺らが蝶々を突き落すと、それを見てすっかり感心しちまつたんだ、それで、お前さんにこの槍を上げましょうというから、それじゃ貰つて行くといつて、こうして担かついで来たんだ」

「えらいねえ友さん、お前は槍一筋で東海道が歩ける身分になつたんだねえ」

「冷かしちゃいけねえ。そうすると、ここでもつてこの槍が役に立つて、あの悪い侍をおどかしてやった」

「何かあのお方が悪いことをしたの」

「悪いことと言つたつて、お前、品の好い切下げ髪ろうぜきの奥様を捉あきまえてね、あの若いくせに狼藉ろうぜきをしようというんだから呆あきれ返けえつちやつた」

「お待ちよ、あのお方がそんなことを……そんなばかなことをするお方ではありませんよ、何かお前、勘違いをしたんだらう」

「ナニ、そうでねえ、見ていられねえから俺らが飛び出したんだ、ところがあいつは、いつか古市の町で、俺らの竿を叩き落した奴なんだ、その時の覚えがあるからね、今日は仕返しのもりで、ギユウと言わせてやろうと思つてるところへお前が飛び出したんだ」

「お前は勘違いをしているよ、あのお方は決して、女をつかまえて無礼なことをなさるようなお方ではありませんよ、何かそ

「こには間違ひがあるのだらう」

「俺らもおかしいとは思ふが」

「その切下げ髪の奥様というのはどこへ行つたの」

「それはどこへ行つたか」

米友が四辺あたりを見廻す時、四辺はようやく黄昏たそがれる。

「やあ、日が暮れるといけねえ、歩き出そう、歩き話とやらか  
そう」

米友は黄昏の色を見て、槍を取りながら立ち上る。お君もまた三味線を取つて立ち上る。ムクもまた起き上つて腰を伸ばす。

「おや、友さん、怪我をしたの、足をどうかしたの」

「足？ これか、これは跛足びっこだ、ハハハ」

米友は、笑いながら腰のあたりを撫なでて、

「隠ヶ岡から突き落された時、ほかの方はもとの通りになつた

けれど、右の足の骨だけが折れてしまったから、それでこの通り跛足を引いて歩くようになった、なあに、痛くもなんともねえ、慣れてしまったから歩くのも楽なものさ、もとは撞木杖しゅもくづえを突いて歩いていたんだが、この槍を貫つてから、撞木杖をよしてこれを突いて調子を取つて歩くと、並みの人よりは早く歩けるくれえだ」

と言いながら米友は、松の木の下の下を離れて、そこらを探し廻り、裂けて落ち散つていた槍の鞘さやを拾つて、これを穂の上へかぶせ、紙撚こよりをこしらえて裂目さけめを結ぶ。

米友は竜華寺りゅうげじの方へ足を向けて、

「それにしても、俺おいらたち二人を泥棒の罪に落した奴は誰だろ  
う、きつとほかに泥棒があるんだぜ、そいつが盗んで、俺らたち  
ちに罪をなすりつけたんだな」

「きつと泥棒がほかにあるんだよ、どんな奴だか知らないけれど憎らしいねえ」

「二人をこんな目に会わせて、故郷を立退かせるようにしたのもそいつの仕業しわざなんだ、早く捜さがし出して明あかりを立ててみてえものだ」

「ほんとうに早くその悪者を捉まえてやりたい」

「ムクは知っているんだろうよ、備前屋へ入った泥棒をムクは知っているに違いない」

お君はムクに話しかけるように言ったが、ムクは、やはり黙つて歩いていました。

「そうよ、ムクはきつと知っている」

庵原村いおはらの無住同様な法華寺ほっけでら。竜之助を乗せた馬の轡くつわを取ったが、りきの百蔵は、そこへ机竜之助を連れて来ました。

「先生、どうかここんところへお坐りなすつて下さいまし」

竜之助の手を引いて坐らせたのは大きな囲炉裡いろりの横座よこざ。

煤すすだらけになった自在鍵じざいかぎ、仁王様の頭ほどある大薬罐おおやかん、それ

も念入りに黒くなったのを中にして、竜之助とが、りきとは炉を囲んで坐りました。

「もう大丈夫でございます、先生、ここまで来れば」

が、りきは頻しきりに焚火たきびをする、その焚火が燈火あかりの代用をするのであります。

「今、坊様に頼みましたから、ほどなくお夜食が来るでござんしょう、どうも御覧の通りの荒れ寺でございます……と言つて、

先生にはおわかりになりますまいが、本堂も庫裡くらりも山門も納所なつしよもごつちやなんで。そうしてこの坊主というのが、引導も渡せば穴掘りもやろうというんでございます」

竜之助は例の通り頭巾ずきんを被ったなりで、刀は側わきに置いて、焚火に手をかざしています。その様は、がんりきがなぜ自分を引張つて来たかもわからず、どうするつもりだか知らないようでしたが、

「お前さんは、どういうお人だい」

竜之助はこう言つて、はじめてが、んりきに問いかけました。

「わつしでございますか」

が、んりきは、焚火にうつる竜之助の蒼白い面をジロジロと見て、

「先生の方からは初めてのお声がかかりだが、わつしの方ではと

うからお近づきなんで」

「どこで会ったかな」

「浜松で、お近づきになつたのでございます」

「浜松のどこで」

「へへ、あの大米屋という宿屋でございます」

「ははあ」

竜之助は頷うなずいた。

「お心当りがございましょう」

「あるある」

「へへ、どうもその節は飛んだ失礼を致しました」

「二つに斬つてやろうかと思つた」

「おつかないこと——しかし先生」

が、ん、り、き、は、胡坐あぐらを組み直して、

「本当のことを申し上げれば、今までに先生のようなお方に出会ったのは初めてでございます、あの晩こそ兜かぶとを脱いでしまいました、出て行けば斬られる、へたに引込めば、やつぱり斬られる、五尺の間を引上げるに夜明けまでかかるなんぞは、今までに例のなかつたことでございます」

「それでも感心によく逃げた」

「命からがら引上げて来ましたが、いや今度という今度は失敗しくじりつづき、先生のところで失敗しくじつて、それから坊さんでまた失敗しくじりました。こうなつちや、がんりきも焼やきが廻まつて、少々心細くなりました」

「あれは遊行上人ゆぎょうしやうじんにんだというではないか」

「左様でございます、遊行上人。先生には斬ざられ損ぞんい、坊さんには丸められちまい、せつかく磨みがいたが、がんりきの面かおもつぶれそ

うでございますから、なんとか眼鼻のあくようにしようと思つて、執念深くもしよつちゆうあれから、お後をつき通してございました」

「後を跟ついても跟つき榮ぼえもすまいな」

「ところがいいあんばいに、こんな風向きになりましたから、ここでまたどうやらがんりきの目が出そうでございます」

「そうして、お前はどうするつもりで拙者をここまで連れて来た」

「どうするつもり？　そうおつしやられると、ちと御返事に困りますが、あつしどもの仕事は、こうすればこうなるというよそうな算盤ばんでやるんではございませぬ、出たところ勝負で、いたずらがしてみえんで」

がんりきは皮肉な薄笑いをして竜之助の面を横から見て、

「まず第一には、七兵衛の野郎を出し抜いたのが面白いんでございます、その次には、あの切髪の御新造ごしんぞを烟けむに捲いてやったのが面白いんでございます、それから先生——先生を馬に乗せてこつちの方へお連れ申すと、あとから七兵衛と、それから先生を仇かたきだといっている若い侍と、それからもう一人、あの艶あでやかな御新造が追蒐おつかけて来るにきまつている、そこでまた面白い一仕事があるんでございます」

「が、ん、り、き、は、自分おれが筋書すじがきを書いて役者に踊らすような気取り。  
「が、ん、り、き、」

竜之助の声が、少しばかりひやりとする。

「何でございます」

「いたずらも仕様がある、へたなことをすると命がないぞ」

「へへ」

が、ん、り、き、は、これまた少しばかり退りさが気味で、

「そりやもう承知でございます」

竜之助は左へ置いた刀を引く、斬るつもりでもなく嚇おどすつもりでもないらしい。

「先生、まだお斬りなすつちやいけません」

が、ん、り、き、は片手を出して押えるような真似まねをして、

「先生の前にはこうして兜かぶとを脱いでいるんでございます、とても腕うでづくで先生に勝つことができせんから、それでツイいたずらがしてみたくなるんでございます、そのいたずらがやり損なつた時は、立派に斬られて死にましよう、まだ板にかけねえんでございますから、もう少しどうか御辛抱なすつて下さいまし」

竜之助は膝まで引いて来た刀。いつもこの辺まで来れば大抵

は人を斬っているのです。がんりきは、前よりもまた少し後ずさり気味で、

「先生」

竜之助の横面よこがおをじつと見込んで、

「どうも、先生の形が気味が悪くつていけませんな、いつその長いのがヒヤリと飛んで来て、わっしの身体からだが二つになるんだか見当がつきませんからな。どうか刀をお置きなすつて下さいまし、そうでなければ近いところでお話をする事ができませんんから——そのいたずらというのはでございませぬ、先生」

がんりきは、やや遠くから用心をしいしい、それでも人を食つたような物の言いぶりで、

「先生——折入つてひとつ先生にお願い申してえことがあるんでございます、それはほかでもございませぬが、あの年増の御

新造、お絹様とやらおつしやいましたな、あの御新造をが、んり、きがいたただきてえんでございます」

「ナニ？」

「お恥かしい話だが、先生が、あんな御新造に侍かしずかれて道行みちゆきをなさるのを見ると、疝かんの虫がうずうずしてたまりませんや。もとより金銀に望みはねえ、腕うでづくでは敵かなわねえから、ここは一番、色気を出し、先生とあの御新造を張り合ってみてえというのが、このが、んり、き、のやまなんでございます。なんと、どうでございましょう、きれいにあの御新造ごしんぞをが、んり、き、にくれてやつておくんなさるか、それとも、女にかけてはどつちの腕うでが強いかか、思うさま張り合ってみようではございませんか」

これを聞いて竜之助は、

「あの女が欲しいのか」

竜之助は刀を差置きながら、

「女というものは水物みずものだから、欲しければ取るがよかろう。しかしあの女は、感心に拙者を江戸まで送つてくれようという女だから、向うで捨てぬ限りは、こちらでも捨てられぬ。それはそうと、もはやここへ尋ねて来るはずではないか」

「ええ、もうやがて尋ねておいでなさるはずでございます、迎えの者を村はずれまで出しておきましてございますから」

「そうか、それからながんりき、あの女が来たらば……」

竜之助は、まだ刀を膝から下へは卸おろしきらないで、言葉が少しく改まる。

「へえ、何でございますか」

が、んりきはやはり用心をしながら返事。

「幸いのこと、お前に頼みがある」

「頼みとおつしやいますのは」

「お前に望みがあるならば幸いのこと、これからあの女を連れて江戸まで下つてもらいたいのだじや」

「何とおつしやいます、わつしにあの御新造様をお江戸までお連れ申せとおつしやるのでございますか。そうしてあなた様は？」

「拙者は、ひとりで行きたい方へ行く」

「こりや驚きました、そういうことはできません、そんな不人情なことはできませんな」

「不人情？」

竜之助は苦笑にがわらいしながら、

「お前は、あの女が欲しいと言うたではないか、それだによつてあの女を連れて江戸へ行くことがなんで不人情だ」

「だつて先生、先生はお目が御不自由なんでございましょう、そ

れを見捨てて、二人で駈落かけおちをするなんぞということは、このが  
んりきにはできませんな」

逃げ腰になつていたが、んりきが、腰を落着けて言葉に力を入  
れる。

「いや、拙者は拙者で別にまた道がある、実はふとした縁であ  
の女の世話になつたが、心苦しいことがある、それで離れよう  
と思つていたが、ちやうど幸い、お前が横合いから欲しいとい  
うによつて、お前に任せたい」

「そりゃいけません」

が、んりきは首を左右に振り、

「それじゃあ事に面白味がありません、からつきり張合いにも  
なんにもなるもんじゃあございませぬ、人のお余り物をいただ  
くような心で、女をものにしてみようというような、そんなが、

んり、きとはがんり、きが違います」

が、んり、きは力りきみ返る。竜之助は苦笑にがわらい。この小賢こざかしい小泥棒め、おれに張り合つてみようというのでさえ片腹痛いのに、死んだ肉は食わないというようないばしの口吻くちぶり。刀の錆さびにするにも足りない奴だがよい折柄おりからの端役はやく、こいつに女のいきさつをすっかり任せてしまえば、女の絆ほだしから解かれることができる。竜之助はこうも思っているらしい。

が、んり、きはそれと知るや知らずや、

「女というものは、上手に拵こしらえるよりも上手に捨てるのが本当の色師だ、いい幸いでお譲りを受けて、持余もてあまし物ものをおつつけられて、それで色男そうろうで候やにさかと脂下やにさかつているには、が、んり、きは、こう見えても少し年をとり過ぎた、そんな役廻りは御免ごうむを蒙りてえ」  
少しく声高こわだかになつて、ふいと気がついたように、

「やれやれ、根っから詰らねえ痴話ちわでたあいもねえ、それは冗談でございますが先生、こんなことも他生たじようの縁とやらでございましょうから、これからわつしどもも先生と御新造とものお伴をして、江戸まで参りましょう、道中ずいぶん忠義を尽しますぜ」

この時、破れた扉こわがガタリという。

扉がガタガタと動いたかと思うと、そこへ身を現わしたのはお絹でありました。

「やあ、これは御新造様  
が、ん、り、き、は、迎、え、に、出、る。」

「どうもたいへん遅くなつてしまいました」

お絹の髪も衣裳もかなり崩れている、それを程よくつくろつて来たものらしい。

「心配していました」

が、ん、り、き、は、お絹の手を取つて、やはり囲炉裡いろりの一端に坐らせる。

「ひどい目に遭あつてしまいました、あの宇津木兵馬という若い人のために取押えられて虜とりこになるところでしたが、折よく変な男が出て来て助けてくれましたから、やつとこつちへ逃げて来ました」

「村はずれまで迎えの者を出しておきましたはずでしたが」

「その人に、そこまで連れられて来ました。ああ、飛んでもない目に遇つてしまった」

お絹は炉の傍に坐りかけてこの内の模様を見ると、荒れ果てた古寺。

「お寺ですね」

「こんなところでございますが、今晚はここで御辛抱ごしんぼうなすつて

下さいまし」

「お寺とは知らなかつた」

「こんなわけでございますから」

が、んり、きは何かと言いわけをする。

「ここへ泊めてもらうのですか」

「へえ、ただいま夜具蒲団やぐふとんを里まで借りにやりましたから」

「ここへ三人で……」

お絹は、なんとなく呆あきれたような面色かおいろです。

「いいえ、わつしだけは御免を蒙つて……ついこの近所に泊るところがございますから」

「それでは、この方とわたしと二人でこのお寺の中へ……」

「左様でございます、御災難とは申しながら、お気の毒でございます、その代り明朝になりますれば、早速わつしが出向いて

参りまして……」

「どうも、こんなところへ泊りつけないから気味が悪いね」

「今夜一晩だけの御辛抱でございます、明日からわつしが御案内を致しまして、やつらを出し抜いて、危なげのない道筋をお連れ申しますから、どうか御安心下さいまし」

「お前さんのためにいろいろお世話になつて災難を逃れたのだから、我儘わがままを言つては済みません、それでは今晚はここへ泊めてもらうことに致しましょう」

「そうあそばして下さいまし」

この時、机竜之助は横になつて炉辺うたたねに仮睡うたたねをしていました。

お絹は横になつた竜之助の姿をしげしげと見ている。その横顔かほをがんりきは盗むようにして見る。

「燈火あかりはないのですかねえ」

お絹は襟をすぼめるようにして、ちよいと後ろをふりかえる。

「お燈明皿しやうみやうひらぐらいありそうなものだ」

が、りきは燃えさしの木片きぎれを松明たいまつのようにして本堂の方へ行つ

てみる、畳の破れへ足がひつかかかって転びそうになった途端に、

代用の松明が消えかかる。

「おつと危ねえ」

また足を踏み締めて、やつと須弥壇しゆみだんの方へ行くと、幸いなこ

とに百匁蠟燭ひやくめろうそくのつけ残りが真鍮しんちゆうの高い燭台に残っていたから、

「有難え、南無なむお祖師様」

が、りきはその蠟燭へ火をつけて帰つて来ると、お絹はその

光で寺の中を今更のように見廻します。

「それでは、夜具蒲団と、お凌しのぎになるようなものを、そう言っ

ていま持たしてよこしますから」

「どうも御苦勞さま」

が、ん、り、き、は、お、絹、の、横、顔、を、見、な、が、ら、扉、を、ガ、タ、ビ、シ、さ、せ、て、出、て、行、く。あ、と、は、寂、然、ひっそりと、し、て、百、匁、蠟、燭、の、炎、ほのおが、の、ん、の、ん、と、立、ち、の、ぼ、る。

「もし竜之助さん」

お、絹、は、仮、睡、うたたねを、し、て、い、た、竜、之、助、の、肩、へ、手、を、か、け、て、揺、ゆする。

「お起きなさいまし、わたし一人じゃ淋しいから」

「が、ん、り、き、は、帰、つ、た、か」

「いま出て行きました」

竜、之、助、は、ま、た、起、き、直、つ、て、柱、を、背、に、し、て、坐、る。

「飛んだところへ引張り込まれてしまいましたねえ」

「法華寺だといふことだが」  
ほっけでら

「法華だか門徒だか知らないが、こんなに荒れたお寺も珍らしい」

「拙者故に飛んだ御迷惑をかけて相済まぬ」

「どう致しまして、旅は道づれですから、かえってこんなこともあつた方が面白いのですよ」

「が、ん、り、き、が言うには、明日は無事安全な別道べつみちを案内することだ」

「夜が明けさえすれば大丈夫。今あの男が夜具蒲団を届けてくれると言いましたが、とてもこんなところで、帯を解いて寝られやしませんから、ここで焚火をしながら今夜は夜通し語り明かしましょうよ」

「それもよかろうが、少しでも休まぬと身体のために悪かろう、拙者にかまわずお休み下さい」

「なあに、一晩や二晩は寝ないでいたって、苦しいことはありません」

お絹は、慣れない手つきをして、炉のあたりに夥おびただしく積み  
た木端こっばや薪を取って火の中へくべました。

柱もたに凭もたれて、うつらうつらとしている竜之助の面色かおいろを見ると、  
痛々しいほどに悄しおれている。いつも悄しおれているような人で、そ  
れで弱い人でもないのだが、今宵は一層悄しおれているように見え  
る。それでお絹は力をつけてやる気になったのか、またはこの  
人に滅め入いられては、自分が淋しみしくてたまらないからであるか、  
つとめて元氣らしくして話をしかけます。

「あの宇津木兵馬という人は、年は若いけれども、なかなか腕  
は出来る人ですね」

「ふむ」

竜之助は軽い返事。

「あの人のお師匠さんが豪えらい人ですつてね」

「それは豪い」

竜之助の面が上る。

「御存じですか」

「知っている」

「島田虎之助という……」

「そうそう、島田虎之助」

「その先生とお立合をなすったことがおありなさるの」

「ない」

「あなたよりお強いのですか」

「……………」

「あなたの剣術のお流儀は、たしか甲源一刀流でございましたね」

「もとはそうであつたが」

「島田先生は直心陰じきしんかげだということではありませんか」

「そう、直心陰」

こう話しかけていると竜之助の面に、ありありと幾筋かの苦悶くもんが現われるのであります。

「けれども、その島田先生もかわいそうなことをなさいました」  
「かわいそうなこととは？」

竜之助は聞き耳を立てる。

「まだお聞きになりませんか」

「まだ聞かない」

竜之助は、我知らず声はずむ。

いろいろの人にも会い、いろいろの目にも遭ったけれど、要するに竜之助の眼中に残り、脳裏に留まって去らざるはただその人あるのみ。その人が斯か様な女ようから同情の言葉を受けるよう

な身になろうとは——竜之助は、それを聞きたい。

この時また、壊れかけた扉がガタリビシリ。

「夜かぶりを持って来ましたが、はあ、御免下せえまし」

男が一人、夜具蒲団と竹の皮包とを持って来てくれたのはそのままにして、話は島田虎之助最期さいごのことにつながりました。

「島田先生は毒で殺されたのでございます、ただの死に様ではございません」

「毒で殺された？」

「病気で亡くなられたように、表面はそうしてありますが、毒殺なのでございます」

竜之助は愕然がくぜんとして驚く。

「誰が殺した、誰が島田を」

「それは誰だか存じませんが……あまり技わざが出来過ぎますると、

自分はそのつもりでなくても、人の恨みが重なりますからね」

「お絹どの、どうして島田がそうなったか、それをそなたがどうして知っている、よく話してもらいたい」

「ちようどよい折ですから、お話し申しましょう、知っているだけをお話し申しましょう」

お絹は柴しばを折りくべて、それを火箸ひばしで掻き立てながら、

「あの先生が、或る時、旗本のお邸へ招かれたと思召おぼしめせ、そのお邸で、いろいろ武芸の話が出て、それからお夕飯の御馳走になつたのでございます」

「その旗本というのは誰の邸」

「それは申し上げられませぬ、あとで申し上げる時節があるかも知れませぬが、今は申し上げられませぬ」

「それから？」

「島田先生も、大へん御機嫌ごきげんがよくて、常よりは御酒ごしゅも過ごしなされ、御料理もよくいただいて、さてその帰りでございます」

「その帰りに？」

「そのお邸でお乗物をと申されたのを、お断わりなすつて、今宵はなんとなく心持が面白いから歩いて帰ると、いくらか微醉ほろよいきげん機嫌でもあったのでございましょう、伴ともをつれずに、たつた一人で下谷おかちまちの御徒町の方へお帰りになったのでございますよ」

「御徒町の道場へな」

「ちようどその日に、わたしもまた同じお邸へ上つたものと思召せ、お女中にお花を教えたりしているところへ、島田先生が見えられたのでございます」

「なるほど」

「その日の正客しょうきやくは島田先生で、お相客あいきやくも五六人ほどございまし

た、女中たちはなかなか忙いそがしそうだから、わたしのことゆえ、台所の方までも出向いて、差さしず図ずのようなことやお手伝いのようなことをしていますと、お女中がお膳部ぜんぶを次の間まで持つて行つた時、その御主人が、まだ座敷へ出してはいかぬ、そこへ置けと女中たちに言いつけて、それから、島田の膳部はどれだどれだと念を押して尋ねていたのを、わたしが聞きました、やはりその時は何の気もつきませんでした」

「はて」

「それから、わたしは奥へ行つて、また台所の方へ出ようとして、そのお膳部を差置いた間まの外を通りますと、誰も女中がないのに御主人が一人でいらつしやる、その時も、やつぱり何の気もつかなくたのでございますが、わたしが通りかかるとその御主人が、あわてたような素振そぶりでついと立ったのが、その

とき少しおかしいとは思いましたが、それとても大して気には留めませんでした」

「うむ」

「それからお座敷では武芸のお話で持ち切りのようでした、料理が運ばれたりお酒が運ばれたりして、大へん陽気になりましたが、それでもほかのお客の時よりは、静かな席でありました。それから、わたしが廊下を渡ってお池の傍を通りますと、お池の中の金魚が三つばかり死んでいて、ひじい緋鯉が一つ死にかけて腹を上にしておりました」

「……………」

「それも別に深く気にしたわけでもありませんが、あれ金魚が死んでいると、ちょうど通りかかりの女中に言いますと、女中たちは物見ものみ高いから、たちま忽ち二三人集まって、金魚ひようじよう評定が始まり

ました、猫にひつかかれたんだらうというものや、いいえ烏が飛んで来ていたずらをしたのに違いないというもの、そうではない狎ちんがお池を搔かき廻したからだというもの、なかには、毒を飲まされたんだ、金魚が毒を飲まされたと言い出したものさえありました、それは笑い物にされてしまつて、毒なんてそんなものがこのお邸のどこにあるの、お嗜たしなみなさいよと言われて、毒と言ひ出した女中は、面を真赤にして文句に詰つてしまひましたのを、後でわたしは思い出してゾツとしました」

「……………」

「そうしているうちに、そのお池ではいちばん大きな真鯉まじい、二尺もあろうというのが、眼の前で、ピンと水を切つて飛び上りましたから、女中たちもみんな驚きました、わたしも驚きました」

「……………」

「鯉はの跳ねるのはなにも不思議はないが、常の跳ね様とは違つて、一跳ね跳ねてから、それがクルクルと水の中を舞つてもがき苦しむのです、そりや見ていても凄すじいほどでございしました。なんしろ鯉はほかの魚と違つて、俎まないたの上へ載せられても、三十六鱗りんビクともせぬという、人間で言えば男の中の男、それが苦しがつて器量いっぱいもがき苦しむのですから、そりや見ていても凄すじくなります」

棚を走る鼠ねずみとしては温和おとなしいと思うと、外ではこの時分から、時雨しぐれが古寺の屋根を濡ぬらしている。

古寺の軒端のきばからも玉雫たまだれが落ちて瓔珞ようらくの音をたてる。外はしめやかな時雨。柴の乾きがよいので、炉では焚火の色が珊瑚さんごを見るよう。お絹は飽かずに語りつづける。

「どうして、烏くわがいじめたり、狎ちんがちよつかいを出したりする

くらいのことで、こんなことになるものですか、これは毒……  
恐ろしい毒と思つているうちに金魚がブクブクと死んで浮き出  
して来ます、その中を尾鰭おひれを打つてその大鯉が苦しみもがいて  
もがいて、とうとうもがき死じにをしてしまいました。女中たちは  
みんな面かおを見合せて、人の色はありませんでしたが、わたしは  
今の真鯉しにぎまの死態から、そのお邸の御主人が膳部の廻りを一人で  
見ていたこと、なんだかその奥に怖ろしいものがあるような気  
がしてたまりませんでした。そのうちに日が暮れました」

「……………」

「わたしが出て行く、その前を島田先生がブラリブラリと歩い  
ていらつしやる、ちようどお月様が出ていました。先生を先に  
立てて行けば夜道をして怖くないからと、ちようど帰り道も  
同じ方へ行くのですからあとをお慕い申して行つたのですね。

そうして行くと、その時わたしの後から来てすれ違つて通り抜ける侍、見たような人でありました。ところは聖堂の森に近いお濠端ほりばたでございました。平素ふだんから淋しいところであるのに、この頃は物取りがあつたり辻斬りがあつたりして、宵のうちから人通りはないようなところなんです、そこを島田先生が一人で、謡うたいをうたつて、我なまじいに弓馬の家に生れ、世上とよに隠れなき身とて……中音ちゆうおんでうたつておいでなすつたが、よく徹とほる声でした。わたしも前にあの先生がおいでなさると思うから、一人であんな淋しいところを湯島まで帰る気になつたのでござい  
ます」

「後ろから来てすれ違つたというのはそりや何者」

「それが、頭中まぶかを目深まぶかにかぶつていたものだから面かおはしかとわかりませんでしたけれど、小腋こわきに槍やりをこう抱かかえて、すうつと、わ

たしを抜いて行く後ろ姿に見覚えがある。名前は申し上げませんが大島流の槍の遣い<sup>つか</sup>手で、やはり旗本のうちの一人なんぞでございます。はて、あの人<sup>ねら</sup>が槍を抱えて島田先生のあとを覗<sup>ねら</sup>つて行くなと思うと、さきの毒一件から、またわたしの胸が噪<sup>さわ</sup>ぎ出しました」

「……………」

「それとは知らずに島田先生は、跡白河<sup>あとしらかわ</sup>を行く波の、いつ帰るべき旅ならん……ここまで来ると謡の節が立消えて、先生の足許<sup>あしもと</sup>が右の方へよろよろとしました。わたしがハツと思うと、先生うなのうんと唸る声、かつと地面へ何かお吐きなされたようであとで思えばそれは血でした。先生はその時に夥<sup>おびただ</sup>しい血を吐いておしまいなすつたのでしたが、わたしはそんなことは知りませんから、それと一緒に先生の足許がよろよろ、右へ左へ

よろけるのを、踏み締め踏み締めしておいでなさる様子が、おかしいと思いました。まさかあのお邸で飲んだ酒が、ここまで来て急に酔いが出たわけでもあるまいし、そうかといって謡の興に乗って、往来中おうらいなかで舞をなさるような先生ではなし、これには思っていますところへ、ようござんすか、いま申しました大島流の槍の一筋——先生の背後うしろから楯たても透れと——あたしはもう、先生が殺されてしまったと思いましたが、さすが名人でも、こういうところを突かれたのでは駄目だと思つて、身ぶるいをして眼をつぶつてしまいました」

「……………」

「毒が廻つたんだと、わたしは直ぐその時、そう思つてしまいました。いかに強い先生だつて、毒を盛られて、中から五臓六腑ごぞうろつぽを絞しぼられたんではたまりません、ああお気の毒な、あれほどの

先生が、こんなことで暗々やみやみと……わたしはお気の毒なのと口惜しいのと怖ろしいのとで、目をつぶってしまいました」

「……………」

「それでも少したつて目をあけて見ると、先生は殺されやしないんです、突かれてもいないのですね、一方は槍をこう構えているのに先生は向うを向いて、やはりよろよろとした足許で歩いているのです。もしわたしが男なら、女でも薙刀なぎなたの一手も心得ていようものなら、あとから助太刀すけだちと出るところなんです、悲しいことにわたしは花鋏はなばさみよりほかに刃物を扱ったことがない女でございますから、怖こわい思いをしながら、むぎむぎとそれを見殺し……ただ見ているよりほかは仕方がなかったのですねえ」

「……………」

「そうしますと、二度目に突っかけて行つた大島流の槍、今度

こそはと思うと、それがひよいと外はずされちまつたんですね、よろよろして足の定まらない島田先生のことですから、直ぐにも突けそうなものですが、それが突けないのですね、突き出すと外されて、突いた人が前へ流れるところを、島田先生がその槍の千段せんだんまき巻のところ……あの辺を押えてしまったのですから、突いた人が動きが取れなくなってしまったのですね。ああよかつたとわたしは思いました、先生のことだから、直ぐにその槍を奪い取つて、反対に突き殺しておしまいなさるか、または刀を抜いて斬つておしまいなさるだろうと思つていますと、先生は槍を押えたままで、自分の腰のものへは手もかけず、振返つて後ろに向いた面の色。その時に月がどの辺にあつたか、よく気がつきませんでした。が、わたしの目には今でもありありとそのお面かおつき付が残つているのでございます、眼からも鼻からも口から

も、血が滝のように——血の管が破裂して、それからみんな吹き出したものでしょうよ、凄いとものなんと……」

「……………」

お絹はその時の光景が思い出されて、そぞろに怖ろしくなつたようでありましたが、

「そうすると、突っかけた槍の人は濠の中へ転げ落ちてしまいました、水音がしないのが変だと思ったら、なんでも堤を伝つて逃げてしまったのですね。槍は島田先生の手に残っています。先生、お怪我はございませんかと言つて駆け出せばよかつたのですけれど、あの時に、わたしは竦んでしまつて、どうしても飛び出すことができませんでしたよ。そうすると島田先生は、その槍をこう杖について、よろよろ、よろよると濠端道をよろめき歩いて、駕籠屋駕籠屋と通りかかる辻駕籠を呼び留めました」

「……………」

「そこで槍を投げ捨てて、御徒町へ行けと駕籠屋へ言いつけたままで、垂たれを上げて駕籠の中へ身を隠してしまわれました。そうして駕籠が飛んで行くのを見送った時に、ようやつとわたしは歩けるようになりました。その翌日、島田先生が急病で亡くなられたという噂を聞きましたから、それとなくその御最期の模様を人からたずねてみますと、あれからお家へお帰りになり、床の間の前に坐つて香を焚たいて、座禅とやらを組んだままで亡くなつておられたということでありました」

後註

一 ママ  
二 「被」は底本では「破」

大菩薩峠 東海道の巻

底本：「大菩薩峠 2」ちくま文庫、筑摩書房  
1995（平成 7）年 12 月 4 日第 1 刷発行  
1996（平成 8）年 2 月 15 日第 4 刷

底本の親本：「大菩薩峠」筑摩書房  
1976（昭和 51）年 6 月初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：(株) モモ

校正：原田頌子

2001 年 6 月 1 日公開

2004 年 3 月 6 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。